



短歌

TANKA+HOSPITAL

ホスピタル



短歌

TANKA+HOSPITAL

ホスピタル



短歌 ホスピタル

医療の現場に身をおく7人の歌人たちが寄稿した

一回限りの短歌雑誌。

日本のどこかにあるかもしれない

不思議な病院へ、ようこそ——。

短歌ホスピタル

CONTENTS

短歌ホスピタル メンバー紹介……4

巻頭エッセイ

医療の仕事の楽しみ方 北山あさひ……6

短歌作品

みぞれ……………小原奈実……8

月への階段……………小原 和……11

雪の夢……………香村かな……15

秋とALIVE……………北山あさひ……19

海蛇……………土岐友浩……23

かなしみは咀嚼できるのとか、知らない……………田丸まひる……26

ひかりの庭……………龍翔……30

田丸まひる×土岐友浩 精神科医対談
生き延びるための言葉をさがして…… 34

評論

沈黙をめぐって 土岐友浩…… 42

短歌ホスピタルQ&A

―執筆者の皆さんに“問診”…… 56

医療にまつわる短歌アンソロジー…… 60

編集後記…… 63

短歌ホスピタル

M E M B E R S



小原奈実 (医学生)

obara nami

1991年、東京都生まれ。
本郷短歌会、同人誌「穀物」所属。
現在医学部6年生。



小原 和 (薬学生)

obara izumi

1991年6月生まれ。青森県出身。
2006年、まひる野入会。2013年、第58回まひる野賞受賞。
現在薬学部6年生。



香村かな (看護師)

koumura kana

所属なし。短歌歴は9年くらい。主な投稿先はうたつかい、うたらば、毎日歌壇。新潟で不定期に「空き瓶歌会」を運営。
職歴は、病院や保育園勤務を経て現在は地元医師会の訪問看護ステーションに勤務。15年目。昨年ようやく主任に昇格。



北山あさひ (大学病院勤務)

kitayama asahi

1983年1月生まれ。北海道小樽市出身、札幌市在住。
2013年、まひる野入会。2014年、第59回まひる野賞受賞。
2014年、札幌市にある某大学病院の治験部門に入職。役職はLDM (ローカルデータマネージャー)。医療資格はなし。



土岐友浩 (精神科医)

toki tomohiro

1982年、愛知県生まれ。京都大学医学部卒業。精神科医。
2004年、「京大短歌」に入会し短歌をつくりはじめる。2015年6月、
新鋭短歌シリーズより第一歌集『Bootleg』(書肆侃侃房)を上梓する。
同歌集で第41回現代歌人集会賞を受賞。



田丸まひる (精神科医)

tamaru mahiru

1983年生まれ。最近では児童思春期の診療を中心にしています。未来
短歌会所属。「七曜」同人。短歌ユニット「ぺんぎんぱんつ」の片割れ
としても活動中。

歌集『晴れのち神様』(booknest)、『硝子のボレット』(書肆侃侃房)
Twitter: @MahiruTamaru mail: mahiru0422@hotmail.com



龍翔 (臨床心理士)

ryusho

1983年生まれ。所属なし。
2009年から短歌をはじめ。2014年、歌集『Delikatessen』(私家
版)を上梓。現在は「うたらば」や「うたつかい」などを中心に投稿。
関西で短歌なあれこれを企画することもあります。
最終学歴は、私立大学大学院博士後期課程単位取得退学。医療職で
もなく、病院勤務でもありませんが、近接領域ということで、今回の
企画に呼んでいただきました。

医療の仕事の楽しみ方

北山あさひ

昨年から大学病院の治験部門でデータ入力の仕事をしている。前職はテレビ局で生放送のタイムキーパーをやっていた。医療資格は何も持っていない。私は医療の分野では「素人」なのである。

入職した当時は見るもの全てが新鮮だった。病院独特の活気が漂う外来棟。たくさんさんの機械が置かれた、まるで工場のような検査室。おびただしい数の情報が記録された電子カルテ。時折聞こえてくる「教授回診」といった言葉や、「救急救命士」という存在は私のミスター心と妄想癖を大いに刺激した。なんだかドラマの中に入り込んだような気がして、最初の数か月はわくわくしながら過ごしたのだが、ある日気がつく。院内のどこにも唐沢寿明や江口洋介や堺雅人はいないのだと。いるのは歌が下手なASKAみたいな教授や、頭に海苔を貼ったお地蔵さんのような医師や、チンピラっぽい救急救命士である。割とすぐに現実に引き戻された。

最近では薬剤の名称に惹かれる。治験では薬剤の使用履歴は非常に大事な情報なので、処方があるたびにデータを入力しなければならぬのだが、この薬剤の名称が実に面白い。たとえば、リウマチの薬である「リウマトレックス」。無駄にかっこいい。最新のCGを駆使した、あまり観客動員数が伸びない近未来アクション映画のタイトルのようなのだ。「ソル・コージェ」は気管支喘息に対して使用される副腎皮質ホルモン剤だが、私にはもう雪と氷に閉ざされた独裁国家の宰相の名前にしか思えない。このように薬剤名は大変味わい深く、様々なストーリーを私の頭の中に描いて見せてくれる。抗炎症や免疫抑制作用の効果が、色々な治療に用いられている「プレドニゾン」は、私の中ではすでに「ステロイド王国の若き王子」として確固たる人格を築いている。東にリウマチの患者あれば行って炎症を抑えてやり、西に喘息の患者あればもう苦しまなくていいと言う。なんてかっこいいんだ。プレドニゾ

ロン、結婚してくれ！ しかし、世の習いとしてかっこいい男子にはすでに恋人がいるものである。ブレドニゾロンにもまたリリカという恋人がいる（疼痛治療剤）。将来を誓い合う若く美しい二人。しかし、闇の帝王・デノスマブ（骨粗鬆症治療薬）によって、リリカは地の涯に攫われてしまう。ブレドニゾロンはリリカを救うべく、双子の女神・リッキシマブとセツキシマブ（ともに抗悪性腫瘍剤）の神託を受け、リリカを、そして世界をデノスマブの魔の手から救う旅に出るのであった。様々な困難がブレドニゾロンを襲う。首狩り族・ボンビバ（骨粗鬆症治療薬）たちに襲われたとき、颯爽と現れたのはドンペリドン（消化管運動改善剤）であった。伊勢谷友介似の伝説のガンマンである（ちなみにブレドニゾロンとドンペリドンは異母兄弟であることがのちに判明する）。仲間他にもいる。人喰い植物がはびこるゾルピデム（入眠剤）の森で出会ったおっちょこちょいの見習い魔法使い・ミドリnP（検査用散瞳点眼剤）。絶海の孤島・セファドール（抗めまい剤）で仲間に加わる僧侶・フェブリク（高尿酸血症治療剤）はかつて両親をデノスマブに殺された過去を持つ。魔女・ジャヌビア（糖尿病治療薬）の協力も得て、ブレドニゾロンは一步步ではあるが確実に、デノスマブへと近づいて行くのである……。

そんなことを考えながら日々業務にあたっている。同僚には絶対に言えない。



イラスト：北山あさひ

みぞれ

小原奈実

医学生としてのアイデンティティと短歌の世界でのそれが鉢合わせするとき、ほんとうにうろたえてしまう。まず名前が違う。活字の上でのみ存在するはずだった小原が、いつの間にか私の身体を乗っ取り、生活に浸潤してきている。

たとえばキャンパス内のカフェで歌会中、「比喩なら比喩らしい顔をしてほしい！」などどわけのわからない熱弁をふるった瞬間、学部と同級生が通りがかり会釈される。あるいは病院実習中に同級生たちの目の前で落とした歌集の表紙にでかでかと『禁忌と好色』と書いてあり、国家試験の禁忌肢^{*}に関する本だと思ってもらえますようにと全力で祈る。もしくは研修医採用試験の面接で履歴書に「サークルは短歌会」と書いて臨んで、面接官の先生方の困惑した表情を前にするも、私には他に何もなければ仕方なくそのまま押しきる。

結局、学部の人たちには短歌のことをほとんど言えないまま卒業してしまっそうだ。

*禁忌肢…計五〇〇問の選択式問題からなる医師国家試験において、法的・倫理的に許されない内容、あるいは医学的に重大な障害をきたす内容の選択肢のこと。一回の試験で二つから三つを超えて禁忌肢を選択すると、他の問題の正答率にかかわらず不合格となる

降りやうのかすかに遅くなりて雪 籠るひと日の暮れかかりつつ

櫛つかふ腕が痛めり圧しつづけし心臓すでになきこの夜を

底冷えよ圧しゐる者の手の熱が胸骨の上のみに移りゐき

胸骨を手放す時刻 頭を垂れて生への門を閉ざせる時刻

またひとり乗せてちかづくサイレンの音なほ高きままに途切れぬ

脳を撮るしばしを暴れゐる人はなかばより脳の像傾ぎたり

頭部裂創縫ひ終ふるころ酔ひすこしさめて嘆かふ喉ふかきこゑ

電飾の灯らずにある中庭に診療棟の夜は明けそめぬ

胸に耳 きみに倚るとき風落ちてひしと音せぬ胸をおもへり

みづからを送らむ舟を彫りいだす鑿^{のみ}ありて鋭^とく時を彫らむよ

解説 「胸骨圧迫」とは一般的には心臓マッサージとも呼ばれ、心停止した人を蘇生するために胸のあたりを両手で圧迫して血流を促す行為を指す。この手を放すのは、蘇生に成功したとき、もしくは、死を確認したときだけである。生きている「きみ」の心音を意識するとき、この世を手放した人の心臓の手触りがふっと蘇る。生と死の間を行き来する医療現場のリアルを伝える連作だ。

(山崎聡子)

月への階段

小原 和

よくハルシオンが詠まれているなと思った。いろんな人に詠まれているのだからハルシオンってメジャーなのかなと思ひ、友人に聞いてみると、尿漏れの薬という回答を得た。それはハルンケア。ハルシオンは睡眠薬だ。

処方されたことのない人にとって、薬の名前は謎のカタカナだと思ふ。勘違いされるくらいなら、「ハルシオン」じゃなくて「眠剤」とか「睡眠薬」と詠み込む方がわかりやすいのではないだろうか？ そもそもハルシオンがよく短歌に詠まれるのはどうしてだろうか？

眠れないことに対する薬は、実は種類が多い。寝付かれない、寝付かなくても途中で起きてしまふ、長い時間続けて眠れないなど、それぞれの症状に対して作用時間の異なる複数の薬がある。ハルシオンは眠剤の中でも「寝付きをよくする」薬だ。つまり、ハルシオンと明記することとで作者がなかなか寝付かれない毎日を送っていることがわかる。また、ハルシオンが五音であることや、「春」と「ヨ」で春の眠たさを身に纏っているイメージを連想させることなどから、短歌に詠み込まれることが多いのではないかと思ふ。

こんなふうに具体的な薬の名前が、作者の眠れない理由や辛い心情をより詳細に捉えるきつかけになるのかも知れない。

自らの意思で鉄に力込めラットの首をじゃきじゃき開く

目の色が透明になりまだ温い身体を置いて抜けてゆく赤

一日中クリーンベンチにへばりつき培養室の住人となる

顕微鏡を覗けば緑の月浮かび殺めしラットの細胞育つ

マイクロの世界にわたしも溶けてゆき君の話を聞かせて欲しい

みどりいろの月に指先届かずに揺れる水面をノートに記す

目の赤きラットが月へと登りゆく夢は慰め目覚ましが鳴る

病院の廊下に柔き光差し見舞いの人らと会釈を交わす

いつ時に追い越されたのか処方箋の妊婦は二つも年下なのに

子宮がんを患いし人は折り紙の金魚をそらに泳がして笑む

同い年の子宮摘出する人に鎮痛薬を届けに行かん

難解な神話のようでモルヒネの構造式を夜空に描く

万能の薬などない今日もまた抗がん剤が処方されおり

マスカラを塗る手を止める髪の毛も睫毛も抜けると告げにゆくから

解説

「じゃきじゃき開く」という解剖の手応えが衝撃的な一首目。冒頭に掲げることで、選んだ道に対する覚悟と意思を告げるようだ。薬剤師は薬局だけでなく入院病棟でも活躍しており、薬の情報を医師や看護師と共有し患者に伝達するなど、その存在はチーム医療に欠かせない。患者（おそらく女性）に抗がん剤の副作用を説明するとき、マスカラを塗るべきではないという選択。学びを重ねてきた薬学生の、凜とした白衣の背中が見えてくる。（鯨井可菜子）

雪の夢

香村かな

時々、両親や自分の人生の終末についてぼんやりと考えることがある。昔とくらべて今は病院で最期を迎えるという人が増え、在宅では九〇代の妻を一〇〇歳の夫が介護するような世の中。自分などはもしかしたら誰にも気づかれずにさみしく孤独死するのかもしれない。仕事から今までたくさんの人たちの最期をみてきた。こうありたいと願いながらもすべての人が思い通りにいくとは限らない。でも、少なくとも自宅で最期を迎えられる人は幸せなのではないかと思う。つめたい医療機器ではなくあたたかい家族に囲まれ、長年住み慣れた家で人生を終える。そんな当たり前にも思えることが実はけっこう難しく、本人の希望以上に家族の覚悟がなければ到底不可能なのだ。もしも近い将来、自分の家族をなんとか自宅で看取りたいと思ったときはぜひ訪問看護を頼ってほしい。その人にとって最もよい人生の終末を家族と一緒に考え、最期の最期まで力になってくれるはずだから。

点滴のあかるい瓶の透明な水がからだに及ぼすひかり

刺すよりも挿されるほうを選びたい差しだされたる薄い静脈

少しでも口からと願う奥さんのトマトはあかくあかく滴る

ブラッドオレンジぎゅつと絞った朝焼けに少し高まる自然治癒力

それぞれに昼の長さが異なれば夜の深さも不揃いなまま

折々のゆらぎの中にある痛み最終的にはぜんぶ正しい

苦痛から解き放たれてゆく人の頬ほの白く雪の静けさ

いくつもの死を見届けてぼんやりと色を持たない明け方にいる

誰かの死あの人の死わたしの死たぐりよせればひとつの入り江

病むこともお祝い事も一本のほどけぬ春の結び目として

関節で抜けなくなった銀の輪の鈍いひかりが知るエピソード

黙る雪だれもこない日しんしんと心音だけが響く寢室

サンプルとしての明日は眩しくて引き寄せられる影絵のほうへ

ゆるやかに化膿してゆく午後冬の乾いた岸にボートは遠い

雪の夢　そこはかたなく降りつもる日々愛おしい人にブーケを

解説 看護師の仕事場は病院やクリニックだけではない。本作からは、あまり知られていない訪問看護の現場を垣間見ることができる。その役割は健康を取り戻す援助だけでなく、穏やかな「看取り」であることも多い。日本において自宅で亡くなる人の数は、一九七六年を境に病院で亡くなる人の数を下回り、現在ではおよそ一二％。希有なものとなりつつある自宅での臨終に、訪問看護師たちは寄り添っている。患者や家族と向き合うなかで降り積もった詩情が、淡い光をたたえる一連である。

(鯨井可菜子)

秋とALIVE

北山あさひ

「治験」の仕事をしている。治験は新薬開発の最終段階で、「新薬候補」を実際に患者に投与し、効果や副作用などを検証しデータを収集する。様々な種類の癌、リウマチなどの膠原病や精神病など、取り扱う病気は多岐にわたる。治験の実施期間はおおよそ一〜三年。患者の来院間隔は試験によって異なるが、一か月おきに来院というスケジュールが多い。私の仕事はデータ入力なので、基本的には患者に会うことはないのだが、毎月のようにカルテを見てみると、その患者とずっと知り合いであったような気持ちになってくる。毎週パークゴルフに通っている胃癌のTさん、糖尿病を併発しているのにポッキーを間食して先生に怒られている悪性リンパ腫のYさん、女性のおっぱいをさわりたいと呟く統合失調症のSくん……。薬を飲み、脈拍を刻み、白血球を増やしたり減らしたり。カルテの中に彼らの命がある。

治験薬の投与期間後、もしくは原疾患進行等により治験を中止した後には、定期的に「生存調査」が行われる。症例報告書に少しでも多くの「ALIVE」が灯りますように。

CT画像繰れども繰れども心がない気持ち悪くてとても眠たい

駐車場いちめんの車いちめんの雨上がり ALIVEです、と応える

酢は立てり血もまた立てりしんしんと血液用冷蔵庫の中に

ベーリンガー・インゲルハイム社うららかに入カマニユアルが役立たず

血を運ぶエレベーターに血を握る一人のようで二人のようで

「北山さん医療資格ないんだ」と斜めに言われ「ねえよ」とおもう

毒ガスより生成されし抗悪性腫瘍剤シクロホスファミドのちは手に負えず 秋

シクロホスファミドの袋を御守りのように思いき素人であれば

会議ひとつ終えてチームに報告す大鵬薬品変人多し

マリさんが辞めてさみしい鳩たちを「鳩」と呼んでは追いかけてまわす

秋のあさ秋のゆうぐれこくこくと人の静脈あおざめゆくも

息を吐き、吐ききりカルテは途絶えたりそこから先はあなただけの森

採血室のオネエが何か畳んでる今日という日の暗がりについて

カタカナで採血管に名前を書くみんなミッシェル・ガン・エレファント

まだあおき銀杏並木の入口が出口で出口が入口　またね

解説 テレビ局から白い巨塔へ。執筆者のなかでは異色の存在である。しかし、その職場はまぎれもなく「命との接点」だ。製薬会社名や薬剤名の響きを転がしつつ、見るべきものを見ている率直な読みぶりである。五首目、十二首目、十五首目などでうかがえる「見えない患者」への心寄せが、連作の魅力を下支えていることにも注目したい。巻頭エッセイ(p.6)は、これぞストレンジャーにしか書けない、そして北山あさひにしか書けない内容。登場した薬に仕事で出くわすと、思わずほくそ笑んでしまいそうで、危ない。

(鯨井可菜子)

海蛇

土岐友浩

少年Aが逮捕されたのは一九九七年六月二八日のことだった。その報道の直後から、彼がなぜあのような犯行に至ったのか、議論が巻き起こったのを覚えている方も多いだろう。どこに問題があったのか。家庭か、学校か、それともニュータウンという地域社会のあり方か。まもなく彼は、ある種の^{*}conduct disorderという病気であると診断され、「原因」はそこ——少年Aの心の中にあったという結論で、議論はひとまずの決着を見た。そして、この事件を通して現代社会の病理を訴えようとしたコメンテーターは、的外れで滑稽な意見を残しただけだった、ということになった。

僕はここで、誰の、どの意見が正しかったかを検証したいわけではない。ただ、いま振り返って思うのは、このような議論が起きること自体が、少年Aと社会との「関係」を考えようという問題意識の表れだったのではないか、ということだ。仮に同じような事件がいま起きたとして、はたしてそれを社会問題と考える人はどれほどいるだろうか、という疑問を抱くのである。

手を伸ばすことを覚えてまず僕がつかんだものは母親のゆび

まだ読んでいないジャンプとマガジンが机の下にある曇りの日

大人たちがひれ伏している王様は裸ではなく透明だった

六月は蛇を隠しておくところ 雨のやまない校庭に行く

これだから雨というのは側溝の蓋にミミズが挟まっている

犯人は少年だった 石楠花しやくなげの花であふれる花壇を歩く

本人の問題としか言えない、とうつぶきがちに言ったのが医師

今ならば中二病だとひと言で切り捨てられる真っ赤な言葉

ずっと見ていられるものはなんだろう二階へ飛んでいくアゲハ蝶

少年は元少年になっていた 海蛇のからまった水槽

* conduct disorder : 行為障害

解説 土岐さんと私は同じ一九八二年生まれで、神戸連続児童殺傷事件の元・少年Aと同一年だ。思春期に「キレる十四歳」という乱暴な世代論でくくられた私たちの多くは、人生の端々で何かと「彼」を意識することがあったような気がする。「透明な存在」と自らを呼んだ彼と、私たちを隔てるものはあったのか、なかったのか。生き物に執着してみせる少年独特の感覚が、「彼」の心象風景と重なってみえる。

(山崎聡子)

かなしみは咀嚼できるのとか、知らない

田丸まひる

どんな縁でこうなったのかはわからないが、ここ数年は精神科医として働き始めた頃には想定していなかったほど数多くの児童思春期の子どもを診るようになった。今、わたしのところに新しくやってくるのは、ほとんどが小学生から高校生までの少年少女だ。朝起きられなくて学校に行けない子、友達との関わり方がわからない子、暴力を振るわれている子、振るっている子、自傷行為のように誰かと体をつなげることで生き延びている子……。 「最近どう？」と訊いた時に返ってくる答えは、正直笑えないものが大半で、冷静に聴きながらもこころが抉られていく。わたしたちの世界は、どうしてこんなに息苦しいんだろう。診察室でようやく泣いてくれた子が、その後手に入れた幸せな時間を一瞬で手放してしまったのを知って、ここは地獄だ、と思ったことがある。息苦しさを共有していた子が年を経て成長していくのを見届けて、ただうれしかったことがある。明日のあの子のことを、いつも祈っている。

まっとうな冬の明け方 切りたての腕に滲んでいる血がださい

ガッコウで習わなかったことだから避妊はしない中三の女子

この部屋はつめたい生け簀 火あぶりにされたところを沈めていても

ベッド柵にローソンの袋を結わえてゴミ袋にして、ここにあなた、昨日
あなたを吊ろうとしていた

ねつとりと油絵具をつけられたような言い訳、息するための

少年のラップを遠く聴きながら二重扉の外へと向かう

いくつかの冬をあなたと呼吸する 死にたいひとを殺せないまま

プロポーズ一日五回いただいた診察室にこぼす目薬

ひとつ残らず受け入れるから駄目というスーパーバイズを受容する日に

首吊りは「いっけい縊頸」ふるえる字を書いて冷たくなっていくわたしの手

「セックスは楽しい？」「嫌い。それよりも先生、この爪、似合う？」「あんまり」

過呼吸の背中に寄せる手のひらが、お母さんより熱いって、言われても

またねは祈り暗喩ではなくまたあした昼夜逆転していても来て

先生も切ってみろよとカッターを突きつけられて吐く白い息

めずらしく大粒の雪 帰らずに好きな仕事を好きなだけして

解説 児童精神の現場にいる田丸さんの歌には、思春期の子供たちの「叫び」が詰まっている。セックスで、自傷行為で、身体と心を傷つける少年・少女たち。医師である作中主体は、彼らの叫びに真摯に向き合いながらも、ほんとうは精神病棟の「二重扉」の外側に存在する自分自身を意識しているのだろうか。「またね」という何気ない挨拶が、祈りに転化してしまう日常。そのなかで、ところどころに挿入される「あなた」の存在が、彼女をかるうじて死から遠ざけているようにも思える。

(山崎聡子)

ひかりの庭

龍翔

心理療法やカウンセリングには、「枠」が不可欠である。専門的には「治療契約」や「治療構造」という言葉になるが、平たく言えば、セラピストとクライアントのさまざまな「約束事」と言えるだろうか。例えば、心理療法やカウンセリングは、基本的に、毎回同じ曜日の同じ時間帯に、同じ料金で、同じ場所で行うことになる。そしてもちろん、よほどの事情がない限り、クライアントは毎回同じセラピストと会うことになる。このような時間、料金、場所、関係性などの「枠」は、日常生活においては、いささか「非日常」なものであり、窮屈に聞こえるかもしれない。しかし「枠」は、セラピストとクライアントに「制限」をもたらすと同時に、「守り」をもたらすものである。非日常であるからこそ、守りがあるからこそ、我々は自分の内面と向き合い、自分を自由に表現することができるのである。時々、短歌という「定型」も、「枠」のように感じられることがある。

秋の日の陽射しも少しやわらいで相談室のはさみはしまう

ケント紙が破れてしまいそうなほどあなたは強く樹の洞を描く

さつきから泣き続けている母親がもう曼珠沙華にしか見えない

どのくらいお辛いですか 襟元にビジュをいくつもいくつも付けて

記録には〈選^{*}択性緘黙〉と書く 今日のおやつはバウムクーヘン

わたくしというみずうみの湖底から間歇泉が噴き出している

こんなにも掘り返されて 駅前の花壇に何を植えるのだろう

先生がへプエル・エテルヌスのことをいよいよへプエルと略しはじめた

えなんちおどろみあ えなんちおどろみあ もう止まらないシーソーである

歩道橋から満月がよく見える 笑顔ばかりがよく褒められる

箱庭の中から砂をひとつまみ取り出し、窓の外に降らせる

砂山に墓石を三基突き刺してあなたは四人家族だという

平等に漂う注意 もうひとつずつ目と耳があればいいのに

カーテンにくるまりながら少年は「月は自分で光れ」と言った

かなしみといかりはおなじものだからボードゲームじゃもう遊べない

* 選択性緘黙^{せんたくせきんもく}……言語能力は正常であるにもかかわらず、選択された特定の場面や人に対して、話すことができなくなる状態
* プエル・エテルヌス（永遠の少年）……心理学者・カール・グスタフ・ユングが提唱した元型（アーキタイプ）の一つ

解説 「えなんちおどろみあ（エナンチオドロミア）」という呪文めいた言葉は、ユング心理学では、一面的になった意識を無意識がバランスを保つべく作用することを意味する（らしい）。シーソーのように揺れ動く意識と無意識。なるほど、臨床心理士の仕事は、クライエントの意識と無意識のバランスを捉え、寄り添う仕事なのだろう。はさみをしまい、心理療法のために描かれた絵や箱庭をともに眺める。多くが緊迫する場面ながら、襟元のビジュリーに象徴されるような、クライエントへの細かな視線が印象的な一連だ。

（山崎聡子）

対談

生き延びるための 言葉をさがして

田丸まひる×土岐友浩

精神科医対談

〈聞き手〉龍翔（臨床心理士）



取材協力：葉ね文庫

——二〇一五年八月八日（日）。大阪・葉ね文庫に集結した田丸、土岐、龍翔、山崎。当初は近隣のカフェで収録予定だったが、店主・池上さんのご厚意で店内を使わせていただくことに……。歌集・句集・詩集に囲まれた短詩系垂涎の店内で対談スタート！

（始めようとしたらいきなりお客さんが入ってくる）

一同 すみません……。すみっここに移動。そこに突然の雷鳴）

田丸 なんだかこの対談を暗示しているような……（笑）。

＋『硝子のボレット』へへへ土岐友浩

精神科医の日常をどう詠むか？

龍翔 気を取り直して……。土岐さんと田丸さんは歌集を出されたばかりですが、精神科医としてお互いの歌集をどう読まれましたか？

土岐 田丸さんの『硝子のボレット』は、精神科医の日常がよく描けている歌集だな、と思って読みました。たとえば、「髪に火を、ではなくて刃を入れながら朝の外來リストをたどる（硝子のボレット）」これは外来が始まる前に電子カルテの画面に並ぶ患者さんの名前を見ているんですね。それで「今日はみんなちゃんと来るかな」とか、そういう心配をしている医者の姿が浮かびました。短歌としては普通そこまで読まないかもしれないんですけど。精神科は他の科と違って、患者さんが診察にちや

んと来るか来ないかってすごく大事なんですよ。

「病室のベッドを秘密基地にして恋の話をせがまれている（ひまわりを抱く）」もすごく好きな歌です。秘密基地って見立てがいいですね。たぶん思春期くらいの子が入院していて、その子が医者と話をしている場面だと思います。病院の中って患者さんにとってプライベートな空間がほとんどないんですよ。だからベッドに好きなぬいぐるみとかを持ち込んでなんとか自分の空間にしようとする、そういう場面がリアルに浮かびましたね。

田丸 思春期くらいの子、っていうのは確かにそうなんです。私は児童精神も診ているので、小学生から高校生ぐらいの子を診ることが多くて、自然とそれが反映されてしまうんだろうと思います。土岐さんの患者さんはどんな層が多いんですか？

土岐 僕は総合病院で働くことが多かったので、おじいさんおばあさんが多いかな。

田丸 割合的に言うと、それだと認知症の方が多いですよ。私の職場はちよつと特殊だと思う。

龍翔 田丸さんの歌集の中では、アミちゃんという思春期の女の子がでてきますが、ご自分のお仕事と照らし合わせてどう思われましたか？

土岐 「夏のカルテ」っていう連作はやっぱりアミと、医者である作中主体が交じってるところが読みどこ



*1 歌集……田丸まひる『硝子のボレット』、土岐友浩『Boo!eg』ともに書肆侃侃房

ろですよね。「どこかしらアミが滲んでいる日にはほぐしたくない恋の燃え殻」は、目の前にいなくなってもアミの考え方が自分の中にある、っていう気づきの歌でしよう。でも、僕はアミが特定の誰かだとは思いませんでした。いろんな患者さんを診るなかで抽象化された女性像を設定して、ディテールをつくっていった連作じゃないかな。

田丸 そのとおりだと思います……先生(笑)。この連作をつくっているときに、子どもの専門病院にいたんですよ。だから、これ私のことですよ、って言われたら困るっていうのがあって。誰でもないけど誰でもある「アミ」というキャラをつくってる部分はあります。

土岐 そういうつくりかたをするのはよくわかりますね。診察室で話したことは外には出さないって信頼感があるから患者さんと話ができるわけで。診察の場面を歌にしようとするといくシジョンにせざるをえない。そこにこういう仕事を歌にする難しさがありますよね。

田丸 でも、具体的な事実をまったく入れていないかっていうと、「父親がいない事実を振りかざす」とか、「カローメイトメープル2本」とかはそんな子もいたかもしれないし。私の中ではあの子とあの子とあの子、って思っている部分があります。医師の仕事だけでなく、仕事の細かいリアルなことって短歌で言えないじゃないですか。「最近こんなすごい新製品を開発して」とか(笑)。

土岐 短歌でリークしちゃって追放、みたいな(笑)。
田丸 でもやっぱり、ぜんぜん精神科に関係ない人と土岐さんが読んでいる目線は違うな、って思った。たぶん他の科の先生は「今日患者さん来るかな」ってあんまり思わないかもしれないし。

土岐 「恋人を睡眠薬に例えればあなたはうすむらさき*2の一粒(硝子のボレット)」っていうのは、ハルシオン*2だとか、そういうのはすぐわかりますよね。形がシャープで、すぐに効いてくれるのが嬉しい、みたいな意味ですよ、これ？

✚『Botleg』へへへ田丸まひね

書かなくてもにじみでるもの

龍翔 逆に土岐さんは職場の歌をほとんどつくられていませんが……。

土岐 僕はまったくつくらないと決めていると言ってもいいくらいです。一つは守秘義務の問題と、あともう一つは現代の精神医学の現場を短歌にして本当に面白いのか、価値があるのか、みたいな疑問がちよつとあります。いまの精神科は科学寄りなので、斎藤茂吉みたいな迫力のある歌がつくれるかというと、難しいな、という気がしますね。患者さんが来たので薬を出しました、という歌じゃ、あんまりイケてないというか……。

*2 ハルシオン……
睡眠導入剤の一種。薄
紫色の卵型の薬で、短
歌ほか文学作品にもよ
く登場する

田丸 私も守秘義務には気をつけていて、出す前に同僚に見せて「これ大丈夫だと思いますか？」と訊いているんですよ。

土岐 それぐらい慎重な方がいいですよ。逆に、まひるさんがそこまでして現場の歌を詠むのはどうしてですか？

田丸 土岐さんは「現場を歌にする価値」って言ったけど、私は価値があると思っていて……。たぶんそれは私の患者さんたちの抱えている問題は、学校や友達関係や家庭のことだったり、誰にでも多かれ少なかれかわりある問題だと思うのね。そういう意味でも、このことを歌にしたい、っていう欲求があるんだと思う。

土岐さんは逆に、歌から精神科的な痕跡を消してるんですよ。でも、読んでるうちに土岐さんのような精神科医っぽい歌集だな、というのは思いました。

土岐 ほう……。

田丸 『Bootleg』では、「なんとなく」とか「○○という」とか、一読すると表現が甘いんじゃないのと思うような言葉の幹旋の仕方をしてるんだけど、単に大づかみなんじゃなくて、言葉や事象を柔らかく捉えてるんじゃないかな、とか。だから勝手に、包み込むタイプとか、やさしく回り込んでくるような診療をしているのかな、って。

土岐 やさしく回り込んでくるって怖いな……（笑）。

田丸 いや、そういうねっとりした感じじゃなくて、ふんわり（笑）。たとえば、「乗客は乗り込んだのに雨の日のドアをしばらく開けているバス（Blue blood）」の「のに」とか。ゆっくりと宙に浮きながら包み込んでいく感じがとてもいいなと思って。相手に切り込んでいかないというか……。私はどっちかというと自分から突き刺していくタイプだけど、土岐さんは相手がいだすのを待ってくれる感じ。

あと、ちよつと仕事に絡めたところっていうと、「From」の「F」って、子どもの心のケアチームで行かれた福島ですよ。これも、一読したら福島の連作だっていうのはわからないようになってるんですけど、あとがきであえて福島に行ったときのことだと言ってるのはどうして？

土岐 そうですね……。三・一一の後に、美術評論家の榎木野衣（*3）さんがTwitterで、芭蕉の「五月雨をあつめて早し最上川」に対して、「すべての詩や小説が大なり小なり放射能を帯び始めている。もはやそれを抜きにして読むことも書くこともできない」とつぶやいているのすごくショックを受けたんですね。この連作も、直接的なことは書かなかったんですけど、書かなくても何かかじみ出るんじゃないかとか、そういう不穏さは意識したつもりです。

田丸 不穏な感じはするね。あえて景色を見ている感

*3 榎木野衣（一九六二年）……美術評論家。『シミュレーションズム』『日本・現代・美術』『戦争と万博』など著書多数

じとか。他の歌とは目の開き方が違う印象を受けました。
土岐 成功しているかわからないけど、あえて「いい歌」をつくりに行かないようにしましょう、というのは思っていました。

田丸 短歌としての名歌とは違うけど、しっかり見よう、記録しようとしている感じは受けました。名歌っぽいところをあえて狙っていかない感じは、信頼できると思っ

た。
土岐 単純に僕が福島に行ったときに一番感動したのが田んぼとか山なんですね。秋だったので金色で道があつて山があつて……それを詠いたかつたという気持ちはありました。

＋精神科の言葉を歌にどう取り込むか？

土岐 あと面白いなと思つたのが、田丸さんの歌集では、「希死念慮」とか「過剰適応」とか比較的最近の精神医学の言葉がでてきますよね。過剰適応という言葉は、「リボんタイ外すぐらいに軽やかに」という比喩を使って伝えるとか、こういう詠み方はうまいなと思ひました。

龍翔 精神医学になじみのない人にとってあまり聞ききれない言葉だと思ふんですけど、それをあえて短歌に詠み込んでるのはなぜですか？

田丸 たぶん私は自然に入れちゃっているんですよ。できちゃったというか（笑）。ただ、すごい専門用語で

はないんですよ。過剰適応だったら過剰に適応してるんだらうな、とか、希死念慮だったら死にたいってことなんだらうなとか。わかりやすい専門用語しか使つてない。土岐さんと精神科の専門的な話をするときにつかうような言葉とは、やはりすこし質が違いますよね。

土岐 なるほど。でも、歌によつてはちよつと言葉が浮いてみえるというか、すこし違和感があるかなという印象もありました。

田丸 確かに、日常の言葉からすると強い言葉だから、難しい部分はあるかもしれませぬね。

＋短歌&医学とのファーストコンタクト

龍翔 お二人が医学を目指されたきっかけは何でしたか？

土岐 僕は小学生のときに『スーパードクターK』^{*4}という漫画を読んだのがきっかけです。Kっていうのは主人公の天才外科医なんですけど、スペースシャトルで手術をしたり、ラクダに乗つて中東の王家に会いに行つたりして、医者の世界って面白そうだな、と……。

田丸 それはスケールが大きいね（笑）。

土岐 主人公は、毎日筋トレしてて体がムキムキなんですよ。「なんでそんなに筋トレするんですか」って



*4 『スーパードクターK』（講談社）……『少年マガジン』連載、真船一雄作。主人公 KAZUYA が天才的な手術の腕で様々な事件を解決していく

聞かれて、「手術をするために必要だからさ」って答えて。それを読んで外科医は無理だなと思いました(笑)。でも、荒唐無稽なんだけど、医学的な裏付けはちゃんとしてるんですよ。ぜひ「短歌ホスピタル」読者の皆さんにも参考文献としてお勧めしたいですね。

龍翔 田丸さんはどうして医師になろうと思われたんですか？

田丸 私は図書館にひたすら入り浸ってる中高生だったんだけど、そこで『病院で死ぬということ』^{*5}って、ホスピスで末期がんの患者さんに立ちあっている先生の話を読んだの。すごく衝撃的だったのとは違うけど、ずっと自分の中に入ってきて……。それで医学部に入って、できれば人の話を聞く仕事をしたいと思ったら、精神科にたどり着いたって感じかな。短歌もその延長線上で、図書館で『かんたん短歌のつくりかた』^{*6}を読んで、「自分にもつくれそう」と思ったのがきっかけだった。

土岐 僕は図書館に短歌の本が置いてあったことすら覚えてないな……。

田丸 じゃあ土岐さんが短歌と出会ったきっかけって？

土岐 僕は穂村さんの『手紙魔まみ』^{*7}です。運転免許の合宿中にたまたま大塚英志さんの本を読んでたら出てきたんですよ。「まみの白い机は夢にあらわれて」「可能性」と名乗った。アイム、ポシビリティ」とか。でも、なんじゃこりゃとしか思えなかったですね。逆に興味を持つ

て、長野の山奥の合宿場から自転車でTSUTAYAに行ってみたら、『手紙魔まみ』が置いてあったので買って帰って。でもやっぱり「わかんねえな」でしたね。しょうがないから穂村弘のことを勉強しようと思って、下山してすぐに「短歌ヴァーサス」の穂村弘特集を買いました。でもそこに載ってた穂村さんの歌も素人にはわかりにくい系のやつで、余計ひどい目に遭いましたね(笑)。結局自力ではわからないから、「もっと勉強しよう」って京大短歌に入りました。

田丸 それはすごい……。

土岐 逆に、すんなりとわかるようなものだったら、京大短歌にまで入ろうとは思わなかったかもしれない。

田丸 TSUTAYAに『まみ』があってくれてありがとう(笑)。私なんか「かんたん短歌」って書いてあったから、簡単につくれるって思ったから。そこが違うんですよ。

龍翔 わからないところに惹かれるというのは精神科医っぽいかもしれませんね。

土岐 それはありますね。僕が精神医学を勉強したいと思ったのも、統合失調症という原因がわからない病気のことを知れたからです。

田丸 そこも土岐さんと私で違うかもしれない。私は思春期の女の子のことをわかる気がして精神科医やっ



タカノ綾

*5 『病院で死ぬということ』(主婦の友社)……医師・山崎章郎によるホスピスを舞台にしたノンフィクション
*6 『かんたん短歌のつくりかた』(ちくま書房)……少女漫画雑誌「キューティ・コミック」に掲載された人気連載「マスノ短歌教」を元に柘野浩一が短歌のつくり方を解説した入門書

てるから。もちろんわからないことも多いけど。
土岐 同じパターンなんですね。なんか怖いな(笑)。
田丸 知らないうちに精神科医としてのスタンスがでてくる(笑)。

＋精神科医と、短歌と……

龍翔 お二人は学生時代から短歌をつくられてきました
が、学生時代から精神科医になる過程で作風が変わって
きたという自覚はありますか？

田丸 私は正直ずっと地続きというか。そりや^{＊8}前の歌集
から十年経ってるから作風は変わってますけど、それは
精神科医になったからではなくて、たぶんいろいろなもの
を取り込んでいく過程で詠みたいものが変わっていつ
たことが大きいと思う。実生活によって表現が変わって
いったという感覚はないですね。

土岐 僕の場合も、ダイレクトに作品には出ないけど
まったく影響がないとはいえないですね。職場の人とか、
患者さんと関わるなかで、いろいろな考え方や人生に触
れてきたと思うので。

田丸 それはありますよね。でもそれは精神科医だから
とか社会人になったからとかじゃなくて、年を重ねて単
純に経験値が増えていったというのがあるかも……。

土岐 精神科医ってたぶん皆さんが思ってるほど特殊な
職業じゃない、というのは思いますね。

田丸 そうだよな。みんな悩んで大人になっていつて
ますよ(笑)。

土岐 まあ、僕はあんまり大人になりたくないんです
けど……。

田丸 そう思ってるのが精神科医っぽいよね。いいよ
ねダメでも、みたいな。土岐さんは医学部に入ったと
きから精神科、って感じてしたか？

土岐 そうですね。中井^{＊9}久夫先生の本がすごく好きで、
憧れて、っていうのはありましたね。

田丸 スーパードクターから中井先生につながったの
は面白いね(笑)。話は変わるけど、精神科医をして
て病まないの、暗い気分になったりしないのってよく
訊かれるでしょう？ そういうとき、土岐さんはなん
て答えていますか？

土岐 病気を診るから病むってことはないですね。仕
事終わりにMR(製薬会社の社員)さんと出くわした
りするほうがよっぽどしんどいです(笑)。

田丸 精神科医ってまわりも精神科医だから癒されて
いる部分はある気がする。

土岐 癒し系キャラが多いですよな。

田丸 もちろん、仕事しんどいとか、疲れたとかあ
るけど、その状況を隣に座っている精神科医に話すと
癒されるという……。

土岐 疲れたとか、しんどいとか口に出すのはすごく

*8 前の歌集……田丸まひる『晴れのち神様』(booknest)



*9 中井久夫(一九三四年)……精神科医。神戸大学名誉教授。ヴァレリーの詩の翻訳など、多彩な著述活動を展開

大事です。ほんとうに。

✦目標は「生きること」

田丸 土岐さんが前に私の歌集を読んで「とにかく生きてほしい、ということをお訴える歌集だ」と言ってくれたのが心に残っていて……。歌集をつくるときに「生きてほしいよね」というメッセージを入れたというのはあつたんですよ。世の中には、絶望して過剰服薬をしたりリストカットを試みたり、とかそういうことって普通にある。それでもいいけど、とにかく生きてて……。……。

土岐 田丸さんの「甘いもの好きの子どもが死にたがる世界に機関銃を野ばら」(ひまわりを抱く)とか、子どもが死にたがるというのはやっぱり変ですよ。こういう歌は、臨床の場面を描きながら、社会とか時代とかそういうところまで批評が届いている作品なんじゃないかと思います。

田丸 でも子どもってすぐ死にたがるよね。病的だからとかじゃなくって。

土岐 中井久夫の文章で、外国の医者に言わせれば、日本の統合失調症の入院患者は、四〇%くらいは退院して社会で生活できるはずだという話が紹介されています。つまりそれだけ、日本の社会で生きていくというのはハードルが高い。だから、死にたがるっていうのも、生

きづらくて苦しい時代なんだというのが背景にある気がします。

田丸 そうだね。でも「生きづらい」だけでは終わってほしくなくて、だから、生きて、ってことにつながるんだと思う。精神科医って患者さんのことを治療しながら、自分にも言い聞かせている部分もないですか？

土岐 そうですね。

田丸 生き延びて、って。

土岐 今日、田丸さんと話してて、作風から精神科医としてのスタンスまでつながっているな〜というのが面白かったですね。

龍翔 最後に、精神科医としてのこれからの目標はありますか？

土岐 これからの目標は、とりあえず生きることかな。
田丸 そうそう。生きてほしいよね。ということ。(笑)。生きてれば短歌もつくれるし、楽しいし……。

龍翔 つながりましたね……。(笑)。
田丸 これからも生きて、みんな楽しく遊びましょう。

〈了〉

沈黙をめぐって

ガリレオが望遠鏡を覗き、肉眼では見えなかった星の数々を見出してから、「もし宇宙の大きさが無限であり、恒星もまた無数に存在するとしたら、夜空はその無数の星の光によってくまなく照らし出されてしまわずではないか」というパラドックスが生まれた。

茂吉の遺した文学的業績は膨大である。歌集だけでも十七冊。詠んだ短歌は一万八千首に及び、『柿本人麻呂』を代表とする歌論、随筆、プライヴェートな日記や書簡のほぼすべてに至るまでが、現在三十六巻の全集にまとめられている。

さらに茂吉研究は研究を生み、茂吉を論じた文章はそれこそ天文学的な数にまで増え続けようとしている。「おひろ」とは誰なのか。「ハキトク」の報を受けた茂吉が乗った夜汽車は何時何分発の何という列車だったのか。そうした深淺さまざまな研究の広がりの前にして僕がまず連想するのが、先のオルバースのパラドックスである。茂吉の足跡はまるで見果てぬ「無数の星」のようだ。天文学者たちはその精神の全貌を明らかにしようと望遠鏡を覗き込み、今も茂吉という巨人を見上げて

土岐友浩



斎藤茂吉は昭和二十八年の早春、心臓喘息（現在でいう心原性呼吸不全）の発作で七十年の生涯を閉じた。茂吉の追悼号となった『アララギ』同年十月号には、「斎藤茂吉先生剖検所見概要」という、三宅仁と平福一郎の手による病理解剖の記録が掲載されている。全文は三千字程度である。

「身長一六一種、体重四三疋、脳重量二二六〇瓦、心臓四五〇瓦」と、あたかも剖検の手順を再現していくかのように、各臓器の重量の計測から「所見」は始まり、次に脳（脳底諸動脈の高度の硬化症、他）から前立腺（左葉に於ける指頭大腺腫形成）に至るまで、全身の病変が余すことなく記載されていく。

茂吉は四十代の頃から循環器系と呼吸器系の二系統の疾患を抱えていた。慢性腎炎による高血圧は、「高度の石灰化性潰瘍性粥腫性大動脈硬化症」および全身の動脈硬化を来し、死亡時、血管はもはや「ぼりぼりしてゐる」と形容できるほどになっていた。

剖検者によれば、死因となったのは左肺優位の広範な気管支肺炎で、「これが直接心臓の負担となり鬱血（右肺や肝臓等）を招来した。他にも茂吉の両肺には長崎時代に患った結核や、大石田での肋膜炎の跡

が、はっきりと遺されていた。

上田三四二は三宅らの所見概要をもとに茂吉の病歴を仔細に検討し、以下のように結論している。

「この満七十年九カ月の大生涯を、病誌を通して見てきた私たちの抱く感慨は、一見強靱そのもののように見えた体軀の、内に秘めた病患の甚だしきではないだろうか。ここに、子規の永臥とこぶしの半生とも、また鷗外の病気を知らぬとみえた一生とも違つて、病みながら決して病いに屈しなかつたもう一つの生き方が見事に示されているように思われる。」

(上田三四二「斎藤茂吉」)

アララギには短命の歌人も多かつたが、茂吉は一度結核に倒れながらも生き延び、老年の歌境へとたどり着いた。そこに注目した上田の慧眼に、僕が付け加えることは何もない。だが、茂吉の短歌や日記を読み解きその病歴をつくり上げていく上田の書きぶりに、僕はどうしてもある血腥いものを感じる。

追悼号に本人の病理解剖録が掲載された歌人など、果たして茂吉の他にあっただろうか。特に不審死だったとは思われない茂吉の肉体が腑分けされた理由はひとまず措くとして、その記録がいつたいなせ、数多の追悼文に混じつて『アララギ』に載らなければならなかつたのか。

茂吉の魅力は、なるほど人を惹きつける。しかしその「無数の星」を見たいという欲望に満ちた眼は、飢えた牙をも隠し持ち、あるときとうとう茂吉を捕らえ、はらわたを白日の下に引きずり出してしまったのではないだろうか。

岩波文庫『斎藤茂吉歌集』の表紙には「茂吉は近代短歌の第一人者であり、日本の近代精神を体現した文学者の一人でもある」といみじくも書かれているが、僕はこの体現という一語に、ある宿命の重さのような

ものと思う。

この小文は、茂吉について何かを調べた、という性格のものではない。僕が考えてみたかったのは、茂吉のすべてを調べ尽くそうと見開かれていた無言の、無数の眼——、その正体のほうである。

∴

ある暑い夏の日の夕、松山城近くの練兵場で虚子はその青年と出会った。

当時虚子は愛媛第一中学の生徒だった。友人たちと野球に興じていたところ、東京から帰省してきた書生数人がやって来て、「おいちよっとお借しの。」と声を掛けた。青年の一人は「袖をボタンで留める」シャツの上に単衣の着物をまとい、兵児帯をゆるく巻き、袴の裾を短くしてふくらはぎを露出し、「俎板のような」下駄を穿いていた。

虚子は「本場仕込みのバッティング」が見られることを「無上の光栄」と思い、早速自分たちのバットとボールを貸し出した。しばらくするとその青年は着物を脱いでシャツ一枚となり、鋭い打球を飛ばすようになった。

取り損なつたボールが虚子の足元に転がってくる。それを拾って投げ返したところ、青年は「失敬。」と言って受け取った。「この『失敬』という一語は何となく人の心を牽きつけるような声であった。」

この青年が子規その人だった。

以上は正岡子規の没後九年目に虚子が書いた『子規居士と余』の冒頭に描かれている場面である。やがて虚子は親友の河東碧梧桐とともに、子規との親交を深めていく。子規は帰省中に三津の料亭で好んで会食を開き、松山までの帰り道で、少年虚子と碧梧桐に俳句の手ほどきをした。

あえて汽車に乗らず、月の夜道を三人で歩いて帰ったこともある。子規が東京に戻ってから、熱心に手紙を交わした。ここから彼らの句作——ひいては後の「ホトトギス」を中心とする俳句革新運動が始まったのである。

子規は『病牀六尺』『歌よみに与ふる書』等の文章が広く読まれているため、ともすれば病弱で気難しいというイメージがあるかもしれないが、むしろ社交的で面倒見のよい性格であり、野球を好むスポーツマンだった。

だから——というわけでもないが、子規はよく食べた。書生時代は学費が入ると必ず牛肉を食いに行き、大量の果物を買って帰った。「大きな梨ならば六つか七つ、樽柿ならば七つか八つ、蜜柑ならば十五か二十位食ふのが常習であつた。」(くだもの)

結核が脊椎にまで及び、痛みにのたうち回り、終日ほぼ寝たきりの生活となつてからも、その旺盛な食欲はまったく衰えることはなかった。あまりに食べすぎるため、正岡家の家計の四割が子規一人の食費に消えていたという。

子規に「明治三十三年十月十五日記事」という晩年の文章がある。大岡信はこれを読み、子規が大病を患いながら新聞によく目を通し、ホトトギスその他の原稿を校正し、清書までしていることに感嘆を惜しまないが、僕などはそれよりも、とにかくよく食べる子規の姿に驚いてしまふ。

「御馳走は、あたたかきやはらかき飯、堅魚の刺肉、薩摩芋の味噌汁の三種なり。皆好物なるが上に配合殊に善ければうまき事おびただし。飯二碗半、汁二碗、刺肉喰ひ尽す。ブランドー一口を飲む。母は給仕しながら、そこに坐りて膝囊にクレオソート液を入れ居り。食了りて、クレオソート三嚢を吞む。漬物と茶は用みぬ例なり。自ら梨二個を剥

いで喰ふ。終に心を嘔み皮を吸ふ。」

これがこの日の昼食の場面である。せつかなので夕食も引用しておこう。

「膳の上を見わたすに、粥と汁と芋と鮭の酪乾少しと。温き飯の外は粥を喰ふが例なり。汁は『すまし』にて椎茸と蕪菜の上に卵を一つ落しあり。菜は好きなれどこの種の卵は好まず。今夕の飯御馳走不足にて不平の気味なり。(中略)粥二碗、汁二碗、芋二皿、鮭の乾肉、尽く喰ひつくして膳の上後一物なし。クレオソート三嚢。自ら梨一個を剥いで喰ふ。心を嘔み皮を吸ふ。」

食べた量というよりも、子規の面目は、その食べ方、梨の芯を嘔み、皮を吸うところに躍如としている。(柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺)という人口に膾炙した句は、遡って明治二十八年、奈良の茶店で御所柿を食べながら詠んだそうだが、いったいこのとき子規は柿をいくつ、どのように食べていたのだろうか……と、俳句の鑑賞にとつてはむしろ余計な想像を僕はしてしまふ。

樽柿を握るところを写生哉 子規

画がくべき夏のくだ物何々ぞ
病間や桃食ひながら李描く

子規はひたすらに食べ、かつそれを写生した。樽柿の句には「自ら自らの手を写して」という詞書がある。子規にとつて「写生」とはなんだったのか、差し当たり急いで答えるならば、それは一句の中に樽柿だけではなく、樽柿を握る自分の手をも書き込むような行為だった。

文学史的に言えば、写生とは、当時の閉塞した明治俳壇を刷新するために子規が打ち出したプロットである。

子規が写生のイメージと理論を西洋画に求めたことはよく知られている。対象を客観的に観察し、主体である〈私〉を、ひとつの空間内に写しとる。その目的は、いわゆる宗匠俳句のように「月並」な、既存の物の見方を解体することにあつた。認識の更新——、子規のリアリズムが革新運動と呼ばれた理由はここにある。

さらに子規は、その手法を連作に応用し、時間のパースペクティヴにおいて〈私〉を捉え直したことを確認しておこう。連作とは対象のうつろいを描くことによつて、時間を瞬間から連続へと繋ぎ直す試みだったのである。

「このころはモルヒネを飲んでから写生をやるのが何よりの楽しみとなつて居る。けふは相変わらずの雨天に頭がもやもやしてたまらん。朝はモルヒネを飲んで蝦夷菊を写生した。一つの花は非常な失敗であつたが、次に画いた花はやや成功してうれしかった。」

（『病牀六尺』八十六／傍点原文ママ）

だが、たとえばこうした一節を読み返して痛感するのは、そうした理屈や目論見をも越えて、子規が写生という行為そのものに無上の喜びを見出していたという事実である。創作は新しい文学理論のための実験ではなく、まして写生への陶醉は病苦を紛らすための慰みではなかつた。

瓶にさす藤の花ふさみじかければたゞみの上にとゞかざりけり

この歌は明治三十四年四月二十八日の作。あまりに早かつた子規の最晩年に新聞「日本」で連載された随筆「墨汁一滴」に収録されている。

子規の代表歌であり、へくれなみの二尺のびたる薔薇の芽の針やはらかに春雨の降る」とともに、写生歌の原点として度々引用される一首でもある。

床の間のどこか、たとえば掛軸の隣あたりに、一枝の藤の花が活けられている。それを見ている視線は低く、鋭い。結句「けり」は強い詠嘆だ。病人子規が垂れ下がる藤をどのように見ていたのか、その眼差しが感じられるようではないか——というのが、「一首」の鑑賞である。

そしてこれは連作「藤」十首の最初の歌でもある。詞書もあり、それを読めばこの歌がつけられたのは夕食後であること、花瓶は実際には床の間ではなく「机の上」にあつたことなどがわかる。連作の四、五首目を見てみよう。

藤なみの花をし見れば紫の絵の具取り出で写さんと思ふ

藤なみの花の紫絵にかゝばこき紫にかくべかりけり

仰向けに藤の花を見ていた子規は、おもむろに起き上がり——と言っても、天井から吊り下げたロープに掴まらなければ、上体を起こすことも叶わなかつた——「艶にもうつくしきかな」（詞書）とつぶやきながら、絵筆を取る。その過程を、歌にする。先にも書いたが、子規の写生の特徴は、ものを描く自分の姿を、景の中へと直に描き入れた点にあつた。では、なぜ子規はそうせずにはいられたのか。

子規が写生画に求めていたものは、実のところ、遠近法や現実の精緻な再現などではなかつた。「藤」十首の最後の歌がそれを教えてくれる。

八入折の酒にひたせばしをれたる藤なみの花よみがへり咲く

花の「色」をよみがへらせること。鮮やかなその色彩をつかむこと。

それこそが、子規にとつての写生の境地であつた。形から色へ、子規の関心は移っていく。「我、画を学ばんか、形体を模するを要せず、輪郭を正すを要せず、只青を塗り紅を抹し黄を点すれば即ち足る。」（「病牀譚語」）

油彩画のように躍動する色を、そのまぶしさを、子規は蝦夷菊に見出し、藤の花に見出したのである。色彩はあふれだす植物の生命そのものであつた。子規はその果実をもぎとり、芯に噛みつき、皮を吸つた。

これ以上言葉を費やさずとも、病んでなお闊達に生きた子規が六尺の世界に何を求め、何を見ていたか、以下の日記にそのすべてが書き尽くされているだろう。「藤」十首を書いた次の日、四月二十九日の文章である。

「春雨霏々。病牀徒然。天井を見れば風車五色に輝き、枕辺を見れば瓶中の藤紫にして一尺垂れたり。ガラス戸の外を見れば満庭の新緑雨に濡れて、山吹は黄漸く少く、牡丹は薄紅の一輪先づ開きたり。やがて絵の具箱を出させて、五色、紫、緑、黄、薄紅、さていづれの色をかくべき。」（「墨汁一滴」）

色鮮やかな世界の中で、〈私〉は自在にうつろう。

うぐいす色の表紙に朱色の筆文字で、かど「花鳥諷詠」という四字が書かれているのに驚いて、反射的に僕はその本を函にしまい、俳句コーナーの棚に戻してしまつた。

虚子選「新歳時記」（三省堂）は昭和九年に初版発行、昭和二十六年に増補改訂を経た第三版が発行され、それと同じものを現在でも書店で

入手することができる。このことだけでも、高浜虚子がいかに決定的な影響を俳句にもたらしたかを窺い知ることができるだろう。——とは言ふものの、僕はこの表紙の「花鳥諷詠」という言葉がお題目のように思えて、拒否反応を覚えずにはいられなかつた。

実際「花鳥諷詠」は、ホトトギスの題目に他ならなかつた。これは門外漢の偏見ではない。

昭和四年、「ホトトギス」の一月号に虚子は「写生といふこと」、二月号に「俳諧趣味」「花鳥諷詠」の文章をそれぞれ発表した。特に「花鳥諷詠」の以下のくだりは、虚子が俳句を「天下無用」のものとして位置づけたことで有名である。

「吾等は天下無用の徒であるが、しかし祖先以来伝統的の趣味をうけ継いで、花鳥風月に心を寄せてゐます。さうして日本の国家が、有用な学問事業に携はつてゐる人々の力によつて、世界にいよいよ地歩を占める時が来たならば、日本の文学もそれにつれて世界の文壇上に頭を擡げて行くに違ひない。さうして日本が一番えらくなる時が来たならば、他の国の人々は日本独特の文学はなんであるかといふことに特に気をつけてくるに違ひない。その時分戯曲小説などの群つてゐる後ろの方から、不景気な顔を出して、ここに花鳥諷詠の俳句といふやうなものがあります、と云ふやうなことになりはすまいかと、まあ考へてゐる次第であります。」（傍点筆者）

この言葉は、「虚子先生によつて、はじめてわが俳句の上に大鉄案が下された」と、ホトトギス門下の人々に喝采をもって受け入れられた。一方で、この俳句を卑下するような虚子の口ぶりを好ましく思わなかつたのが水原秋桜子だつた。秋桜子は「いさゝかの新味もなく、昔ながらの風流と解され」かねない「花鳥諷詠」という標語そのものに反感を抱

き、「花鳥諷詠々々々」となへられる題目の聲に、私はたゞ耳を塞いでゐるよりほかはなかつた。」と、そのときの絶望をかなり率直に語っている。

虚子は子規から受け継いだ「写生」の理念を「客観写生」、後に「花鳥諷詠」へと昇華させた。そして俳句とは「形に於て十七字、質に於ては花鳥諷詠である」という教えを説き、秋桜子の嘆きをよそに、結社「ホトトギス」を空前の成功に導き、俳壇を手中に収めた。

だが、主宰虚子の示した俳句は、どのような「写生」とも異質な、底知れない恐ろしさを持つ不気味なものだった。

立ちならぶ辛夷の蒼行くごとし 虚子

自らその頃となる釣忍

牛の子の大きな顔や草の花

覆とり互いに見ゆ寒牡丹

栞して山家集あり西行忌

ここに挙げた句はどれも虚子独特の、しかし説得力のある季感を捉えた佳吟であることは言うまでもない。辛夷のつぼみはまるで入学式の学童のように愛らしく並び、夏の到来は、忘れていた釣忍の記憶を呼びもどす。秋の季語である「草の花」は牛の子と対比されることによって、可憐であるよりもいっそう儚く、寒牡丹はほとんど官能的なまでの微笑みを〈私〉に見せている。

これらの句の魅力を、「行くごとし」「その頃となる」「大きな顔や」「互いに見ゆ」という、いかにも虚子らしい大づかみな措辞が醸し出す雰囲気、あるいは「ただごと」という批評用語を与えることにも、異議を唱えるつもりはない。

けれど、こうした鑑賞や批評を続ける氣に僕がどうしてもなれないのは、一度選ぶ言葉を選ると、この句に受けた第一印象がたちまち薄れ、言葉を重ねるほどどこかへ流れ去ってしまう氣がしてならないからだ。

だから忘れないように、何度でも言わなければならぬ。虚子のいくつかの句は、まぎれもなく破壊的である。

「行く」という動詞は当然「どこへ」という行き先がセットのはずだが、この句ではその「どこへ」が一切示されず、まるで言葉だけが剥き出しになってしまったかのような座五の「行くごとし」に、僕は言いようのない不安を覚える。「自ら」に「その頃」を重ねるのはあまりにも茫漠としてはいないか。「牛の子」という、属性として小さなものの直後に「大きな」という形容詞を持つてくるのは、狙った通り越して無神経だろう。「寒牡丹」と〈私〉という本質的に非対称なはずの二者を、なぜ「互に」の一語でまとめてしまえるのだろうか？

虚子の句では、ごくごく大雑把に言えば、僕たちが無意識に、前提として世界と交わっていたはずの約束が軽々と乗り越えられ、踏みこじられている。

五番目に引いた「西行忌」の一句は、もしかしたらそれが最もわかりやすい例かもしれない。俳句の約束に通じている人ほど、西行忌に山家集、という配合には唾然として目を疑うか、あるいは「つきすぎ」であるがゆえに、ほとんど禁忌に近い感覚を覚えるはずだ。この句を前にして、鑑賞の道標は失われていることに気づくだろう。その意味で、僕にとってこれは、どんな前衛作品よりも批評的で、メタ的な、詩歌を読むという行為の意味そのものを問いなおすような作品である。

「辛夷の蒼」や「牛の子」の句を、たとえば以下の碧梧桐の句と比べてみたらどうだろう。

白魚並ぶ中の碎けてあたり

碧梧桐

馬の艶々しさが枯れ芝に丸出しになつてゐる

この二句は典型的な「新傾向俳句」である。碧梧桐もまた子規に写生を学び、いわゆる自由律の俳句を次々につくるようになったが、僕にはその理由がとてよくわかる。碎けた白魚、丸出しの馬。その存在感と、作者が感じた衝撃を伝えるべく、五七五という定型は破壊されなければならなかったのだ。

前節で、写生とは認識の更新であると書いたが、碧梧桐は定型という認識の枠組そのものを解体するために、自由律という方法論を選び取った。

そう、「定型」とは文字通りの「枠組」である。だがそもそも「枠組」とはなんだろうか。

一枚の画用紙は枠組として自明ではない。そこにある紙をひとつの枠組と見るか、あるいは虚空間と見るかは、人によって、またそのときの心理状態によって異なるだろう。

虚子が「ホトトギス」の人々に説いた「季語」と「定型」は、言うなれば俳句という画用紙の内側に引いてみせた四角い枠だった。その枠を手がかりとして虚子は花鳥風月を描くよう、弟子たちに求めた。

そしてその「写生」の出来栄を評価するために虚子が用いた手段が「選」であった。子規もまた他人の句を選び、批評し、添削することを好んだが、虚子のそれはさらに醒めた、徹底的なものだった。

虚子の「選」と云ふことは一つの創作であると思ふ」という言葉は有名だが、「ホトトギス」の主宰として虚子が最も重視したのが雑詠欄の選句だったことは言うまでもない。『雑詠全集』の序文で虚子は「私は人によつて採択に斟酌をしない。」と述べている。選句への不満も意に介さず、弟子の「背叛」にも拘泥せず、「私はこの犠牲者を沢山に出した

雑詠全集を自ら尊重する。」と言い切った。結社の本質は「選」にあることを、誰よりも自覚していたのが虚子だった。

昭和十年の座談会で虚子は「自分を信仰せよ」とまで発言しているが、これはみずからの権威を錯覚した宗教家の驕りと解するべきではない。ここで信ぜよと言われているのは、花鳥諷詠の題目の下に、虚子が理想とする「極楽の文学」が具現することなのである。

虚子は「花鳥諷詠」と「選」というふたつの明確な、そして決定的な枠組を俳句に築いてみせた。それがホトトギスに何をもちたかは、雑詠集にまとめられた佳句の質と量を見れば明らかだろう。枠組を与え、心理学的には相手の心的空間を保証するということでもある。この意味で、師としての虚子の振る舞いは、僕の眼にはほとんどクライアントに対する臨床心理家のように映る。

その成功を守るために虚子はまた、新傾向俳句を打ち倒し、それのみならず、久女や石鼎などの、ホトトギスの脅威となりうる優れた作者たちを次々と排除したことも当然忘れてはならない。

その功罪は別に問うとして、ひとつ見逃してはならないことがある。今、僕は「枠組を与える」という言葉を使ったが、与える側は虚子と、与えられる側はホトトギスの弟子たちとでは、「写生」そのものの意味合いが根本的に異なるということだ。

すなわち虚子はホトトギスにありながらただひとり、所与の枠組としての「写生」も「選」も、ついに持つことがなかったのである。果たしてそれがどのような意味を持っていたか。それを考えさせる忘れがたいエピソードを秋桜子は書き残している。昭和二年の暮れのことである。

大晦日に、水竹居、たけし、私、素十の四人は鎌倉の虚子庵へ招かれた。一日ゆつくり遊ぼうといふことであつた。好い天気で風もなかつた。虚子庵の門をはいると、庭がきれいに掃かれて、立札がひとつ

立つてみた。どうしたことかと思つてそれを読むと、「この庭は自分の氣に入るやうに造つたものではなく、與太郎のいふ爺が勝手に刈り込んであるので、殺風景なものであるが、それでも多少趣のあるところには矢印を附して置く」といふ意味のことが書いてある。さうして先づ返り咲きしてゐる椿のところに第一の矢印の立札があつた。

「先生、今日は大分はしやいでおいでですね」と、私はたけしに言つた。「叔父さんは、ふだんは黙りがちなのに、ときどきこんなはしやぎかたをするんだ。」

第二の矢印の札は、渋柿の二三十残つてゐる木の下に立てゝあつた。第三は繁茂してゐる八つ手の傍である。第四の立札をさがすと、そこには二枚の朝鮮瓦があり、一茎の菊が咲いてゐた。第五はすでに枯れはてた芭蕉を指してゐる。而も、いさゝか小高くなつた所には「第一形勝地」といふ小札が立てゝあつた。「これはいよいよ以て尋常のはしやぎかたではない」と、私達は思つた。

(水原秋桜子「高浜虚子——並に周囲の作者達」)

「返り咲きした椿」「柿の木」その他が立て札によつて指し示されている虚子の庭は、虚子の句と同じようにグロテスクである。

虚子庵に入ると、「子規から貰つた明月和尚の書」「蕪村の尺牘(一書簡)」などが飾られ、それぞれに「宝物一」「宝物二」という貼り紙が付けられていた。「芭蕉の瓢の図及び瓢の銘」はわざわざ「偽物」と断られてゐる。

平田百穂の絵もあつた。「尺五位ほどの紙横物で、潮来風景を描いた上出来の作であつたが、表装はなく、無造作にピンを使つて壁にとめてあつた。」秋桜子はそれを見て言う。

虚子は書画も骨董も嫌ひであつた。「あんなことをして置くなら、

わかる人にやればいゝのに」と、私は素十にさゝやいた。

筆を抑えているが、絵画を愛する秋桜子には、表装も施さずピンで絵を飾つてしまふ虚子の神経に我慢がならなかつたのは想像に難くない。

だが虚子は本当に「書画が嫌ひ」で「わからな」かつたのだろうか。そうではなく、剥き出しの絵は、虚子の世界そのものだったのでないか。

虚子は秋桜子たちに「これを見よ」と言わんばかりに立て札を設け、貼り紙をつけた。結果として「物」は二重の意味で覆い隠されている。自分たちが見るより先に虚子に見られてしまつた「物」は、もはや鑑賞の驚きや喜びを分かち合うような「物」ではありえない。少なくとも秋桜子たちはそのような地平で「物」を見ていた。

ただ、虚子だけは、そうではなかつた。

虚子は、自分が、あるいは人間が築き上げた枠組というものを、ついでに自分では認識しなかつたのではないだろうか。庭の立て札や宝物の貼り紙、そして百穂の絵は、そのことをはつきりと示している。たとえて言うなら、絵にどんな余計なキャプションが付いていようが、あるべき額縁がなかるうが、そんなことは虚子の眼には何の関係もなかつた。

作者としての虚子の句は、大胆であり、無造作であり、そして自由である。その自由さとはつまり、先入観という名のヴェールが取り払われた場所で花鳥風月を見渡すことに他ならず、そこに虚子の「写生」の境地はあつた。その世界で「物」は「物」として、ただ変わらなずにそこにある。真空中のキログラム原器のように、決して色褪せることはなく、しかし新しいということにも価値はない。もちろんそんな風に「物」を見ることが出来る人間など存在しない——一人、虚子を除いては。

子規以降、おそらく本質的な意味での「写生」が可能なのは、虚子だ

けだったのである。

∴

短歌にとつてそれはおそらく歴史でもなく、過去でもない。それは否応もなく巻き込まれ、逃れることも問うこともできず、気づけば、いつ終わるとも知れない現在となつてしまつた。

短歌は、なぜ、それを詠むのだろうか。

自分でも短歌を詠むようになってから、いや、大学一回生の夏休み、合宿免許の宿舎の四人部屋の狭いベッドで『手紙魔まみ、夏の引越し(ウサギ連れ)』という歌集を読んで「現代短歌」と出会つたときから、僕ははずつとそのことを考えていた。

沈黙のわれに見よとぞ百房の黒き葡萄に雨ふりそそぐ 斎藤茂吉

第十五歌集『小園』収録。昭和二十年九月二日のいわゆる降伏文書調印式の後、まもなくの作である。茂吉はこのとき郷里山形の金瓶村に疎開していた。家族に犠牲者こそなかつたが、東京の病院と自宅は五月の空襲で焼かれ、数万の蔵書が灰燼に歸した。

歌意は、明快である。夏が終わわり、葡萄棚はまもなく収穫の時期を迎えようとしている。だが、茂吉の眼にはそれが秋の実りではなく、「百房の黒き葡萄」という果てしない暗闇と映つた。

何の説明も要しないような絶唱であり、終戦の心象風景として、この一首はいつまでも読者の記憶に残ることだろう。

だが、見よ——というこの一語が、僕にはどうしても気になるのだつた。

ここで「見よ」と茂吉に呼びかけているのは、いったい誰なのだろう

か？

この疑問を掘り下げた文章を、僕はまだ読んだことがない。ときどき、「まるで葡萄が『われわれの姿を見よ』語りかけているかのように」云々という解説を見かけることがあるが、葡萄がしゃべるといふような擬人化は、茂吉の歌にはおおよそ似つかわしくない。

いや、文法的に考えて「見よ」と言つたのは「葡萄」ではなく「雨」だという人もいるだろう。なぜなら下の句の主語が「雨」なのだから。いや、そういう具体的なものというわけではなく、ここで語りかけているのは葡萄や雨を含めた「景全体」なのだ、というのがもつとも一般的な意見かもしれない。「景全体」は「自然」とも言い換えられる。つまりは「天」が、雨を降らしている。その秋雨の音が、茂吉の耳には「見よ」という声と聞こえたのではないか。

「葡萄」から「天」まで、どのあたりに声の発話主体を定めるべきか、様々な読みが考えられるが、そもそも、この「見よ」は本当に外部からの声なのか、と僕は疑いたくなつたのである。むしろこの声は、沈黙する「われ」に呼びかけるもう一人の「われ」——内なる声だつたのではないだろうか。

後でもう少し詳しく見ていくように、茂吉の写生歌は、決して客観に徹するようなものではなかつた。茂吉は「自分という人間もまた自然の一部である」と考え、感情や内面の表現をむしろ重視した。その意味で、暗澹たる思いを抱え、自らの声なき声に顔を上げてみたところ、その光景を茂吉は見た、という読みも、けつしておかしくはないはずだ。もし僕たちがこの歌を無意識に、景が語りかけてくる歌である、と読んでしまつているとするならば、それは茂吉の写生観を歪んで理解しているといふことなのではないだろうか。

僕はここで、この読みが正解だと主張したいわけではない。他の仮説、たとえばこの声を「過去の記憶」からの声、もつと言えば、時空や主客

をも超えた何者かの声として、この歌を読み直してみたいという思いもある。外部からの声ではなげいけないか、と問われれば、返す言葉を持たない。

なぜ僕が「見よ」にこだわるのかというと、前節で虚子の写生をめぐって考えたように、ただ「見る」と、「見よ」と言われてものを見ること——そこにある差異をもう一度確認したかったからだ。

子規は（窓の外の虫さへ見ゆるビードロのガラスの板は神業なるらし）など、ガラス越しに見えるものを詠んだ作品を多数残しているが、子規庵の障子にそのガラス戸を入れたのが虚子だったというのはあまり知られていない。虚子は病床から外の世界が自由に見えるようにして、子規を喜ばせた。その一方で、弟子たちには自由な物の見方を許さなかった。生没年を並べてみると、二人の生きた時代は意外と重なっている。

齋藤茂吉 明治十五年生—昭和二十八年没

高浜虚子 明治七年生—昭和三十四年没

茂吉は第一高等学校三年生のとき、神田の貸本屋で「竹の里歌」を読んで短歌に目覚めたと回想しているように、虚子と同じく茂吉の出発点もまた子規だったことは、改めて指摘するまでもない。二人は子規の「写生」の概念を独自に発展させ、「アララギ」と「ホトトギス」という大結社をそれぞれ率いた。

昭和四年、茂吉は『短歌写生の説』を刊行し、それを受けて虚子は短歌と俳句の「写生」について話し合おうと、「ホトトギス」誌上の座談会に茂吉を呼んだ。いわゆる客観写生論争である。どのような議論が交わされたかは篠弘による「現代短歌論争史（五〇）」（『短歌』昭和三十八年十一月号）に詳しい。

座談会の場合は二回設けられたが、茂吉は終始、虚子の唱える「客観写生」というものを徹底的に批判した。〈吾はもや安見子えたり皆人の得がてにすとふ安見子得たり（藤原鎌足）〉を例として万葉の歌にまで遡り、

詩歌にとって「心の写生」がいかに必要であるかを力説した。一方で虚子も「俳句に於いて主観描写を試みようとするものは多くの場合失敗である」と述べて、主観描写は短歌に任せ、俳句はやはり客観描写に徹すべきであると答え、譲らなかつた。

茂吉の提案によって、写生の主観や客観を抽象的に議論しても仕方がない、作品に即して論じよう、ということになったのだが、そこで提出された子規や島木赤彦の短歌の読みをめぐって、茂吉はやはり虚子たちをこき下ろし、「無理解」「幼稚」「初学者にも及ばず」と罵倒の言葉を並べてみせた。ついには「虚子氏の俳句は、はじめから叙情的で、客観的であるといふよりも主観的であつた。」と、虚子が「客観」を説くことそのものが欺瞞ではないか、と言わんばかりに虚子自身を攻撃し始めた。

そして茂吉の論争の多くがそうであるように、客観写生論争もまた茂吉からの激烈な論難の末に、平行線をたどつたまま終わった。

一見不毛な意見交換だったようにも思われたが、この座談会に加わつた秋桜子は「吾々の考へていた客観写生というものよりも非常に範囲が広い。」と、むしろ茂吉の考へに感銘を受けていた。茂吉は虚子を変えることができなかったが、秋桜子は茂吉に倣い、俳句に「かゝやかしい主観」を詠もうと、後に「自然の真と文芸上の真」を書き、虚子の「客観写生」を批判して、ホトトギスからの独立を果たした。「この論争が現代俳句の起点におのずからなつたという底深い収穫をみのがすわけにはいかない。」（篠弘）

それにしても、いったいこの相手への人格攻撃も辞さない茂吉の好戦的な態度は、どこから来るのだろうか。

茂吉は本来、理性と明晰さを備えた人間である。医学者として博士号を取得しているのももちろん、医学論文「電撃痙攣療法に就て」（昭和十六年）は短い症例報告だが、これを一読すれば茂吉がいかに聡明で慎

重な臨床家だったか容易に想像することができる。

だが、茂吉は理性の無力と限界をも知っていた。それは子規の「十七文字だと思つて馬鹿にしてをつた俳句もなかなか我等の力には及ばんといふ事がわかつて来た」という言葉に共鳴していることから推し量れる。

だからこそ、茂吉の写生論は謙虚で、むしろ受動的なものだった。

感情の自然流露も写生だと言へば、写生を極端に主観的に取扱つてゐることになるだらうが、また反面から見れば、自分の感情の動きまでも万有実在の一相と見なすといふのは、極端に己を控え、恣意を抑へた、受動的、他力主義的、非主観的な態度とも言へよう。茂吉の写生説は、さういふものであつた。(柴生田稔『斎藤茂吉伝』)

茂吉は主観を説いたが、それは自然や短歌を前にしての自分の小ささを知つていればこそだった。茂吉自身は「写生」を「実相に観入して自然・自己一元の生を写す」ことだと繰り返し語っているが、それは他の写生論、たとえば虚子の以下のような説明とは、どう違ふのだろうか。

「例へば桜の花を見る場合には、その花に非常に同情を持つ。あたかも自分が桜の花になつたとき心持で作る。すなわち大自然と自分と一様になつた時に写生句ができるのです。」(傍点筆者)

自然に感情移入し、自然と自分が一体となるというのは、言い回しは違つても、写生の境地として多くの歌人、俳人が説くところである。茂吉の「実相観入」も、やはりこの中に含まれる。違いがあるとすれば、ひとつには茂吉の感受性は常人をはるかに超えていた、ということだろう。

子規は「色彩」に自然を見たが、茂吉は視覚だけでなく、聴覚、触覚など五感すべてを研ぎ澄まし、自然にわけ入つた。「実相観入の説はアララギの説というよりも、茂吉個人の説であつた。茂吉の死後に実相観入はない。」と茂吉の追悼文で述べたのは山口誓子だったが、これは、茂吉の方法がおよそ余人に真似できるようなものではなかつたことを示している。

だが、より重要なのは、「自然」と言つたとき、茂吉の脳裡にはひとつのありありとしたイメージ、すなわち「故郷」があつた、という点である。

茂吉にウィーンとミュンヘンの留学時代を書いた「蕨」という随筆がある。

きっかけは、生理学の研究をしている日本人留學生の「S君」が何気なく発した「君、独逸にも蕨が沢山生えてるところがあるね」と一言だった。いや、きつかけという軽い言葉はふさわしくないかもしれない。「蕨」という日本語は茂吉の耳に「異様に響き」、その響きに取り憑かれるようにして、それを採つて食うべく茂吉は六月のある日、リッフェルゼーへ旅に出た。湖畔での蕨採りに茂吉は丸一日を費やしている。蕨を新聞紙いっぱい抱えてミュンヘンに戻つたあと、茂吉は「日本婆さん」と呼ばれる女主人に白米を焚いてもらう。蕨は重曹を入れて自分で煮た。「そんなものを食べて中りますぜ」と忠告を受けたが、「己はきようは畜類になるんだ。」と茂吉は上機嫌に答えて自分の部屋に戻り、卵と同じにした蕨に「伊太利のMargarin」という醬油をかけて、「留學生の誰にも知らせず、独りで貪り食つた。」

茂吉は蕨に故郷を見た。決定的なことは、「故郷」を、茂吉は故郷その場所ではなく、異国での彷徨の途上に見出した、という点である。随筆「蕨」の最後の章で、茂吉はミレーの旧居を見るためにフランスのパルピゾンを訪ねる。その地で茂吉が見つけたものは「農家の虔しい忍従

の生活」であった。

畑は丘陵の遮るものなく目路の限り続いているところがあつた。そこには常にミレーの画題に出てくる堆糞があり、群羊がおり、遙か向うには、晩鐘あるいは祈禱と訳されてゐる、L'Angelusの寺院が見えており、大きな落日が真っ赤になつて畑の上に残っているのなども、Barbazan風の「あわれ」を印象せしめた。(「蔽」)

「異国」というのは、留学先のヨーロッパ諸国を指すわけではない。高等小学校卒業後、山形の農村から斎藤紀一の許に上京したときに、茂吉の異国への旅は始まつていたのである。

茂吉はみずから異国に「同化」させることをしなかつた。鰻が好物だつたことはよく知られているが、佐藤佐太郎によれば他に蕨や納豆、擬宝珠、なめこなど、ぬめりのある食べものを好んで食べたという。それらは少年時代から、茂吉が故郷でいつも口にしていたものだった。茂吉は故郷を離れてからも衣食住のぜいたくをせず、勤勉に働き、夜は幼いころと同じように、ふんどし一枚で床に就いた。「同化」しないということはまた、茂吉においては戦う意思と一体であつた。

「或る絵具と或る絵具とを合せて草花を画く、それでもまだ思ふやうな色が出ないとまた他の絵具をなすつてみる。(中略) 神様が草花を染める時もやはりこんなに工夫して居るのであらうか。」

(正岡子規『病牀六尺』八十九)

子規が草花に見たように、茂吉もまた自然に「神様」を見ていた。「あらたま」編輯手記の最後ですでに茂吉は「神神よ、僕の歌集を護りたまへ。」と書いているが、茂吉にとって故郷は神々に護られたものであり、

短歌はバルビゾンの晩鐘のように神々へ捧げられるものであつた。ここである故郷とはもちろん、蔵王の火山がそびえる山形盆地の寒村のことに他ならないのだが、茂吉は万葉集の研究を通して、山には神が住み、春になれば四辺に光が満ち、人は山水鳥獣と共生し、すべては自然のうつろいとともにある、そのような始原の世界を見ていた。

茂吉の写生とは、異国に神々のおもかけを見出す歩みであり、祈りそのものだった。祈りの中に人間を解き放ち、太陽のひかりに統べられた生きとし生ける万物の、その力を借りること、そのために茂吉は詠つた。

茂吉が不幸だつたとすれば、戦いを求める人々に希われ、彼らのために多くの歌をつくるようになったことだろう。茂吉もまた戦つた。それは故郷を呼び醒まし、神々を求める戦いであつた。その戦いのすべてに大いなる天地の力を宿すべく、全身全霊をもつて茂吉は詠い続けた。

しかし昭和二十年八月十五日、祈りは破れた。生まれ育つた金瓶村で戦いの終わりを告げるラジオ放送を聴き、そして茂吉は祈ることをやめ、沈黙を選んだ。ゆえに、この沈黙は、途方もなく重い。

塚本邦雄は『茂吉秀歌』で、「沈黙のわれ」の「の」の使い方——「するしつつかある」の意味で格助詞の「の」を使うことに疑問を呈している。

『沈黙のわれ』には、少なからぬ無理がある。茂吉なればこそ罷り通るたぐひの、強引な、短絡的レトリックではあるが、言葉の力とは怖ろしいもので、いつの間にか、それなりに読者を納得させてしまつた。」

このように書いているが、実は塚本邦雄の第二歌集『裝飾菜句』には、これとまったく同じ語法を用いた歌がある。

荷馬車蒼きしづくたらせり沈黙のわれらに再たのいくき迫りつ

塚本邦雄

モチーフの共通性からも、この歌が茂吉の本歌取り、焼き直しであることは明らかだろう。塚本が『茂吉秀歌』を書くよりもかなり早い段階から茂吉を強く意識していたということの、ひとつの証左である。「写生」を捨て、「暗喩」と批評、そして新しい短歌の韻律を武器に立ち上がったのが前衛短歌だったが、ちょうどボジフィルムとネガフィルムのように、方法論は違っても、前衛短歌が詠っていたものはやはり旧来の短歌とまったく同じ「現実」だったのではないだろうか。

ただ、この歌が茂吉と違って「沈黙のわれら」と複数形であることに注意を払うべきである。塚本は、この「沈黙」は茂吉だけのものではないことを見抜いていた。

虚子もまた、沈黙について語っている。

沈黙の力は偉大であります。俳句も沈黙の文芸であります。能楽も沈黙の文芸であります。俳句がなるべく簡単なことを叙して、他の多くを沈黙の力に持つところは最も偉大なる日本人の精神力を發揮したものであります。(『ホトトギス』大正三年十月号)

戦後、虚子は新聞記者の質問に対して、「俳句は戦争に何の影響も受けなかった」と答え、人々の観感を買ったというエピソードがある。虚子と茂吉、二人の差は、ここで端的に明らかとなっている。

この文章は戦前のものだが、虚子はおそらく、写生で戦争を語ることはできないと知っていたのではないだろうか。あるいは祈りではなく沈黙の力によってしか、戦争というカオスと対峙することはできないと見抜いていた。虚子は沈黙することで俳句を護り、茂吉は、戦争を詠んだみずからの作品を封印した。

「われら」に、「再たのいくさ」を迫っているのはいったい誰だろう。

荷馬車なのか、荷馬車から滴りおちる雫なのか、それとも——と考えるとき、僕は最初の問いに立ち返ったことに気づく。

「見よ」とは、誰の言葉だったのだろうか。

いずれにせよ、茂吉は晩年、彷徨の果てに故郷に戻り、思いがけずその声に出会ったのである。沈黙の中で初めて茂吉は、どこからか自分に語りかけてくる、もう一つの声を聞いた。それはあらゆるものが破壊され尽くした故郷に新たな命を吹き込む声、祈りの息吹に違いなかった。

「百房の黒き葡萄」の闇は、終戦の虚無や絶望と解するべきではない。その豊穡な闇の奥には、やはり神々がいた。「見よ」とは、茂吉にそれを教える声だったのである。

..

穂村弘に、歌集には収録されなかった「手紙魔まみ、イツツ・ア・スモールワールド」という連作がある(自選歌集『ラインマーカーズ』に収録)。「手紙魔まみ、夏の引越し(ウサギ連れ)」の愛読者であれば、冒頭から「ウサギ」の死が予感されていることに驚くだろう。そうでなくても、この連作の前半と後半の落差に驚かない読者はいないはずだ。「まみ」は「ウサギ」を看取り、「嘗めかけの鮎をティッシュの箱に」置いたまま、あの夢を見る。

それは関取たちの戦争というファンタジックな夢だった。

夢に來て金の乳首のちからびと清めの塩を撒きにけるかも

雲竜型、不知火型のミサイルを担いで金剛力士は吠えよ

「前頭九枚目より五枚目をただちに前線へ派遣せよ」

「前頭四枚目より筆頭をただちに前線へ派遣せよ」

「小結及び関脇及び大関をただちに前線へ派遣せよ」

連作の後半のほとんどは、このような歌で埋め尽くされている。「撒きにけるかも」や「金剛力士は吠えよ」という勇ましい文体から、この夢が誰の、どの戦争の記憶から生まれたものかは明らかではないだろうか。その歌人がかつて見た悪夢の世界を今、「まみ」は見ている。

この連作ほど意識的ではないにしても、戦争を詠んだ現代短歌は、すべて茂吉の戦争詠のパロディではないか、と僕は思うときがある。

僕たちは誰も戦争を知らない。知っているのは、それがいかに歌い継がれてきたか、ということだけだ。僕たちはそれを語るべき言葉を持たない。だとしたら、できることは茂吉たちの遺した言葉を真似ようとするか、そのような語り口に抵抗するか、沈黙するかのみかだ。

誰の声ともわからない声に「ちからびと」たちは次々と動員されていく。「まみ」はそのおぞましい声を聞き、しかし茂吉がそうしたように「ちからびと」の擬・近代的な戦いを詠い上げた。その背後には夥しい死があった。

降りそそぐ清めの塩のきらきらと世界へもどる道を埋めて

連作「手紙魔まみ、イツツ・ア・スモー・ワールド」の最後の一首である。初句の「降りそそぐ」は、「百房の黒き葡萄に雨ふりそそぐ」と響き合っている。

「まみ」は目覚めなかった。引き返すための道は埋もれてしまったのだ。「まみ」は夢と現実とが渾然一体になった世界にとどまり、そしておそらくその世界の人々によって、茂吉と同じ宿命を背負わされた。

だが「まみ」は祈り続けただろう。なぜなら『手紙魔まみ』は祈りの歌集だからである。それは、生まれ変わって、また会いましょう、という祈りだ。穂村弘は「まみ」に祈りを託し、「まみ」は祈った。

祈りは、持続している。

(参考文献)

『斎藤茂吉歌集』山口茂吉他編 一九五八年 岩波書店

『斎藤茂吉歌論集』柴生田稔編 一九七七年 岩波書店

『斎藤茂吉随筆集』阿川弘之他編 一九八六年 岩波書店

『斎藤茂吉』上田三四二 一九六四年 筑摩書房

『茂吉秀歌「霜」から「つきかげ」まで百首』

塚本邦雄 一九八七年 文藝春秋

『高浜虚子——並に周囲の作者達』

水原秋桜子 一九五二年 文藝春秋新社

『近代作家追悼文集成34』一九九七年 ゆまに書房

※漢字は書名・人名の一部を除いて常用漢字に改めました。

短歌ホスピタル

Q&A



執筆者の皆さんに
医療&短歌にまつわるアレコレを“問診”してみました。



将来こんな医療者でありたい

自分が直接役に立てることに関しては、お話をさくことを含めて確かな技術をもっていたいし、そうでなくとも困りごとの内容を見極めて力になりそうな別の方法へつなげてゆきたい。できれば新しい知見を重ねることにもかかわってみたいです。



7 仕事中短歌を思いつく？
仕事中はあんまりないです。
車で移動中にはあるかも。
すぐ忘れますけど。



8 「読みましたよ！」って言われたら？
お恥ずかしい。(じつはけっこう
自分から宣伝している)



9 好きな医療系歌人
田丸まひるさん



10 将来こんな医療者でありたい
自分自身が痛いとかほんと
だめなので、できるだけ痛みや
苦しみのないやり方を工夫した
いと思っています。将来は在宅
のえきすば一になりたい。

問診カード

短歌ホスピタル

お名前

1 お仕事の必須アイテム・相棒はなんですか？

2 職業病だな~と思うのはどんなとき？

3 好きな医療行為は？

4 名前や響きだけでいったら、好きな薬はコレ。というものは？

5 おススメの医療本、医療漫画、映画 etcをおしえてください。

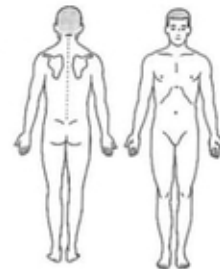
6 逆に、医療漫画・医療ドラマなどのフィクションに触れたとき、
ここが気になる！というのはどんなとき？

7 お仕事中(授業中)に短歌を思いつくことはありますか？
そんなときどうする？

8 同僚や患者さん(クラスメート)に「〇〇さんの短歌読んでます/
読みましたよ！」って言われたら、どうこたえますか？

9 好きな医療系歌人をおしえてください。

10 さいごに、「将来、こんな医療者でありたい」というビジョンに
ついてお聞かせください。



小原 和 (薬学生)

- 1 必須アイテム・相棒 治療薬マニュアル
- 2 職業病だな～ 生クリームを泡立てるときにボウルも回してしまう
- 3 好きな医療行為 軟膏の練合
- 4 好きな響きの薬剤名 リクシアナ (抗凝固薬)
- 5 おススメ医療系作品 ER 緊急救命室
- 6 医療フィクション気になる！
薬剤師が出てこない！ バイアルが陽圧になってる！*
*バイアル (薬品を入れる容器) から中の液剤を注射器で取り出す時に、バイアル内を陰圧にしてからでないとう身が吹き出してしまう
- 7 授業中短歌を思いつくことは？
あります。教科書やプリントの余白に書き込んでいます。
- 8 「読みましたよ！」 って言われたら？
という経路でその本・歌にたどり着いたか詳しく聞きます。
- 9 好きな医療系歌人 曾我玲子さん (薬剤師)
- 10 将来こんな医療者でありたい
薬剤師としての仕事をきちんと出来るようになることはもちろんなんです
が、出来るだけ病室に行って、患者さんとたくさんお話してきたら良いな
と思っています。

小原奈実 (医学生)

- 1 必須アイテム・相棒
iPad。メモするには速く進みすぎののにレジメすら配られない講義のパワポスライドを写真にとったり、骨や筋肉の構造を 3D で示してくれるアプリを入れたり、ネット上で国家試験の過去問を解いたり。
- 2 職業病だな～
煮物などで魚の頭が出てくると燃えます。動眼筋…
…水晶体……と思いながら箸でほくしてたべる。
- 3 好きな医療行為 聴診。
- 4 好きな響きの薬剤名
メロベン (抗菌薬)。ペンギンのキャラクターがいる。
- 5 おススメ医療系作品
映画「レインマン」。奔放な弟と自閉症の兄の物語。
- 6 医療フィクション気になる！
医療関係に限りませんが、恋愛要素過剰なものなどでしょうか。
- 7 授業中短歌を思いつくことは？
歌のことはを思いつくというより、無意識のうちに種を拾っていて、
後で歌を作ろうとしたときに蘇ってくることはあります。
- 8 「読みましたよ！」 って言われたら？
凍り付いてしまうとおもいます……。
- 9 好きな医療系歌人
岡井隆の歌には、一般の方には伝わらないのでは……という医療
ネタをみつけることがまれにあります。医学部を志す以前から
葛原妙子が好きなのですが、彼女の父も夫も息子も医師であっ
たことを最近考えます。

香村かな (看護師)

- 1 必須アイテム・相棒
必須アイテムは七つ道具が入った黒くて大きな鞆。
相棒は 10 年乗っている空色のアルト。
- 2 職業病だな～
何気に人の血管が気になるとき。
- 3 好きな医療行為
好きじゃないけれど得意なのはカテーテル類の交換。
ほとんどは必要だから仕方なくやっています。
- 4 好きな響きの薬剤名
クラリス (抗生物質) カリオストロっぽいから
- 5 おススメ医療系作品
おすすめの映画は「病院で死ぬということ」と「レナードの朝」。
どちらも生きていくのに本当に大切なことは何かを考えさせられます。
ドラマ「ちゅらさん」もおすすめ。NHK の朝ドラで放送されていたの
ですが私が今やってる仕事そのものなので共感もてました。舞台
が沖縄という土地柄も魅力的です。
- 6 医療フィクション気になる！
病院ばかりじゃなくもっと在宅に関する内容があってもいいん
じゃないかと。

北山あさひ (大学病院勤務)

1 必須アイテム・相棒

御守りと塩。職場で席替えをしてから背中が痛む日が続き、半分ギャグのつもりで御守りと塩を持って行ったら痛くなくなった。

2 職業病だな～

仕事に疲れてくると「疲労 グレード1」「傾眠 グレード3」など、同僚たちと自らの状態をCTCAE(有害事象共通用語基準)でグレーディングして遊びます。

3 好きな医療行為

事務職なので医療行為はできませんが、病理部の腫瘍標本の作製に興味があります。

4 好きな響きの薬剤名

プリンペランとペラプリン。プリンペランは胃の働きを良くする薬で、ペラプリンはプリンペランのジェネリック医薬品。カルテで見るときに意識のどこかで「プリンプリン」という声が聴こえる。

5 おススメ医療系作品

「総合診療医ドクター G」(NHK)

6 医療フィクション気になる!

医師や看護師がハツラツとしすぎ。

7 仕事で短歌を思いつくことは?

ないです。

8 「読みましたよ!」って言われたら?

逃げます。

9 好きな医療系歌人

医療系歌人というよりも、家族や自らの病氣、命を見つめた無名の人たちの歌が好きです。

10 将来こんな医療者でありたい

最長5年の契約期間が延長できればそれでいいです。

土岐友浩 (精神科医)

1 必須アイテム・相棒

うーん……特にコレというのはないです。アイテムを使わないのが、内科や他の診療科と違うところかもしれません。

2 職業病だな～

最近だと「掟上今日子の備忘録」を観ていたら「漢方薬の睡眠薬」というのが出て来て、思わず何の薬のことだろうかと考えてしまいました。職場の先生とも議論しました。

好きな医療行為

3 医療行為というのとちょっと違いますが、風景構成法*が好きです。

*風景構成法: 中井久夫によって創案された精神疾患に対する芸術療法(絵画療法)の一つ

好きな響きの薬剤名

4 ベルソムラ(睡眠薬)、メイラックス(抗不安薬)

おススメ医療系作品

5 「スーパードクターK」(p.38 参照)は名作なのでぜひ読んでください。

精神科領域では笠原嘉先生の「軽症うつ病」(講談社新書)などどうでしょうか。勉強になります。

医療フィクション気になる!

6 僕はあんまりリアリティを気にしないです。医療ものの作品は、元ネタ探しがけっこう好きですね。たとえばドラマ「Dr. 倫太郎」の第1話冒頭のシーンは、春日武彦先生の著作に出てきたエピソードを踏まえたんじゃないかと観ているのですが、どうなのでしょう。

7 仕事で短歌を思いつくことは?

通勤のときに短歌を考えることはありますが、仕事はないです。

8 「読みましたよ!」って言われたら?

「あー、ほんまですか! いやーどうも嬉しいです。ありがとうございます。え、どこで読まれたんですか?」とかなんとか……。

9 好きな医療系歌人

浜田到です。歌集は手に入りにくいですが、大井学氏の評伝「浜田到 歌と詩の生涯」(角川書店)をぜひ読んでみてください。

10 将来こんな医療者でありたい

僕の目標は中井久夫先生です。雲の上の方ですが、少しでも近づけるようになりたいと思っています。

田丸まひる (精神科医)

- 1 必須アイテム・相棒
必須というか、持っていないと怒られるのは院内 PHS です。電話への反応は素早いです。
- 2 職業病だな～
美容院で美容師さんの悩みを聞いてしまうとき……。
- 3 おすすめ医療系作品
「治らない」時代の医療者心得帳—カスガ先生の答えのない悩み相談室」(春日武彦著、医学書院)。
若手の医師向けの本ですが、大人の対応を知りたい人や頑張りすぎている人など、医療関係者以外にもおすすめです。
- 6 医療フィクション気になる！
医療ドラマでは、どうしてみんな病院の屋上に集まるんでしょうか。職員同士が密会していたり、車椅子の患者さんが空を眺めていたり。屋上に自由に出入りできる病院で働いたことがないので気になります。
- 7 仕事中短歌を思いつくことは？
仕事中は意識が切り替わっているので、仕事以外のことを考えることはないです。締切り前だと、休み時間に(思いつくというか)絞り出していることはあります。
- 8 「読みましたよ！」って言われたら？
同僚には隠していないので、素直にお礼を言います。もっと素直に、「よかったら歌集を買ってね」と言うこともあります。患者さんと、ちょっと困るかな。答え方は相手次第です。

- 3 好きな医療行為
圧倒的にときめくのは、開腹手術の際に小腸を押さえておくお手伝いです。ふるふると柔らかくて色も可愛くて楽しいのです。でも精神科医になってしまったので、なかなかそんな機会に恵まれずに困っています。
- 4 好きな響きの薬剤名
しばらく考えたのですが、名前や響きで好きになっている薬はないです。新薬の名前がちょっとださいと、つい言いたい放題言ってしまいます……。
- 9 好きな医療系歌人
沙羅みなみさん(精神科医)。
「日時計」(青磁社)おすすめです。
- 10 将来こんな医療者でありたい
忙しくなるばかりだと思いますが、ゆったりと構えつつもフットワークの軽い医師でありたいです。あと小腸を(略)

龍翔 (臨床心理士)

- 1 必須アイテム・相棒
目と耳と甘いもの。
- 2 職業病だな～
美術館に行ったときに、作品から芸術家の心理を分析したくなるとき。
- 3 好きな医療行為
医療行為はできないので、特にありません。
- 4 好きな響きの薬剤名
ハルシオン(睡眠導入剤)。ギリシア神話に由来しています。
- 5 おすすめ医療系作品
カッコーの巣の上で、レナードの朝、八月のメモワールなど。
- 6 医療フィクション気になる！
フィクションが色濃い場合には、全体的に気になってしまうので、なるべく観ないようにしています。観てしまった場合には、必ず監修者をチェックします。
- 7 仕事中短歌を思いつくことは？
パソコンを使って作業をしているときや文献を読んでいるときに、たまに思いつくことはあります。そっと頭の片隅にメモしておきます。
- 8 「読みましたよ！」って言われたら？
同僚には、短歌を詠むことは公言していますが、筆名は秘密にしています。もし作品を読まれることがあったら「ありがとうございます」と答えると思います。クライアントには、自分のプライベートな事柄は極力話さないようにしています。
- 9 好きな医療系歌人
田丸まひる、土岐友浩。
好きな心理系歌人もいますが、秘密にさせてください。
- 10 将来こんな医療者でありたい
常にフレキシブルで、バランスよくありたいです。

医療にまつわる

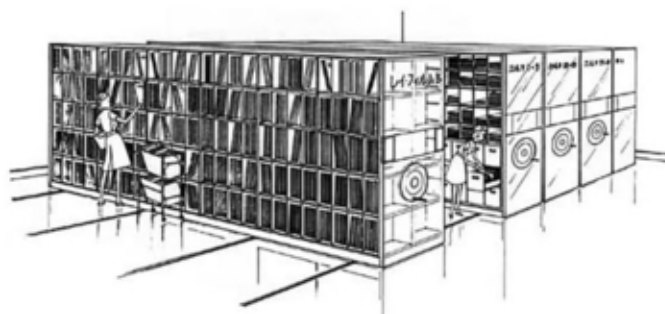
短歌アンソロジー

小原 和選

すみやかに反応したるわが右手カルテを見つつ薬を扱ふ

曾我玲子『薬室の窓』（砂子屋書房、二〇〇八）

作者は病院薬剤師。調剤室を知り尽くした右手で薬を扱ふ一方で、カルテを見ながら患者さんの全体像と処方意図を読み解いている。流れるように調剤しているようでいて、い
ろんなところに目を光らせている作者。この歌を読むたびにこうあらねばと背筋が伸びる。



小原奈実選

灰のなかに軽金属のひかりあり焼け残りたる人工弁の

大辻隆弘『汀暮抄』（砂子屋書房、二〇一三）

悪くなった心臓の弁を機械弁に置換していたのだろう。置換後の心音は、カチ、カチ、と時計のようだという。火葬によって失われるはずだった亡き人の身体の時間が、送る人の記憶の内に、思いがけずも再生されている。

香村かな選

まんまるい言葉ばかりだ　なにひとつ死の感触を知らないわたし

田中ましろ『かたすみさがし』（書肆侃侃房、二〇一三）

実際に死を前にした人にしかその恐怖はわからない。だから第三者のどんな言葉も突き刺さることはない。そんな無力感が伝わってくる歌だ。でも時にはまんまるい言葉のほうが救いになることもあるって信じていたい。

北山あさひ選

ベッド脇の小さき台に向きあいて母とふたりで枇杷を剥きたり

藤田千鶴『白へ』（ふらんす堂、二〇一三）

入院病棟は静かだ。どこか気怠く、どこか張りつめ、けれども透き通っている静けさ。それは患者やその家族が、命と向き合う心の静けさでもある。小さなテーブル。小さな枇杷。命もまたそのように静かで小さなものだと思う。

田丸まひる選

ひさかたの光の眠り heavenly blue の薬二錠は廻りめぐ

沙羅みなみ『日時計』（青磁社、二〇一四）

「halcyon days」という連作の最後に置かれている一首。ハルシオンは寝つきをよくしてくれるタイプの睡眠導入剤で、即効性がある。錠剤の独特の淡い色は「heavenly blue」と呼ぶにふさわしい。眠りそのものも天国のようであればと願う。

編集後記

およそ一年前、いろいろな巡りあわせで医療系出版社に勤めることになった。

前職では旅や広告やデザインの仕事をしていたのだが、とつぜん、「嚙下（飲み込み）」「褥瘡（床ずれ）」などの文字が踊り症例写真がドカンと載っている雑誌の編集部へ。なにもかも物珍しく感じているとき、ふと、医療現場でがんばっている歌友たちのことを思い出した。

山崎聡子さんは、この仕事においても頼もしい先輩である。編集にあたり山崎さんと打ち合わせを重ね、執筆陣の歌やエッセイにふれるうちに、ますます自分が「医療の世界をわかっていない」ことを思い知ることになった。

それでも、今回出会った七人の作品は素晴らしく、まっすぐに問いを投げかけてくるものばかりだった。これからは「わかっていない」の向こう側を見据えて、わたしも前に進んでいきたい。

葛藤を厭わずに作品を生み出してくださった執筆者の皆様、敬意と感謝を表します。そして、「短歌ホスピタル」にご来院くださった皆様にも厚くお礼申し上げます。ありがとうございました。

鯨井可菜子

自分でも意外すぎることに、医学を専門とする出版社に就職して十年が過ぎた。担当してきた分野はおもに歯科だが、その間にも医師や看護師、管理栄養士、薬剤師、言語聴覚士、理学療法士、作業療法士、助産師……とさまざまな医療職の人たちの原稿を担当する機会に恵まれた。

情に厚く、わたしの婚期をやたら気にかけてくれた親戚のおじさんのような医師（故人）、インタビュウのために入ったカフェで開口一番にシャンパンを頼んだ看護師、新聞に掲載された私の歌集の紹介を見て内緒で買ってくれた歯科医師。その先生が見せてくれた若書きの小説……。

あまりにもいろいろなことがありすぎて、思い出すと出来の悪い走馬燈のようだが、医療界は、濃くて、魅力的で、エネルギーが豊富な人々が多く生息する世界だということが、わたしが十年間で突き当たった唯一断定できる真実のように思う。そして、その一端が、「短歌ホスピタル」に寄稿してくださった七人の作品から伝われば、それ以上に嬉しいことはない。

さいごに、鯨井さんと赤羽の飲み屋さんで立てた思いつき企画が実現した奇跡に感謝します。鯨井さんのすばらしき事務能力と現実直視力にはほんとうに助けられました。ありがとうございます。

山崎聡子

短歌ホスピタル

 **twitter @tanka_hospital**

2015年11月23日 初版第1刷発行

発行人 鯨井可菜子・山崎聡子

デザイン Simamular Design Inc.

発行所 短歌ホスピタル編集部
〒330-0062
埼玉県さいたま市浦和区仲町2-16-10-304

Copyright ©2015 Tanka Hospital & Simamular Design Inc. All right reserved.

印刷所 しまや出版

小原奈実
小原 和
香村かな
北山あさひ
土岐友浩
田丸まひる
龍翔

Editors:
鯨井可菜子 山崎聡子